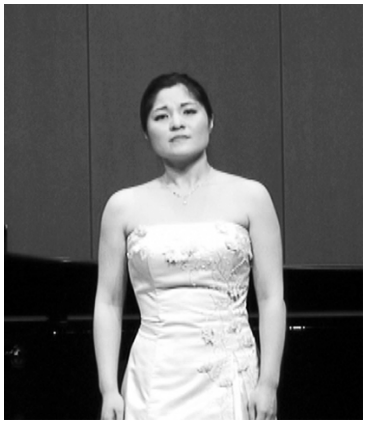
グラビア

Fresh Concert CMDJ 2011

～より豊かな音楽の未来をめざして～

開演前の演奏者および関係者の集合写真



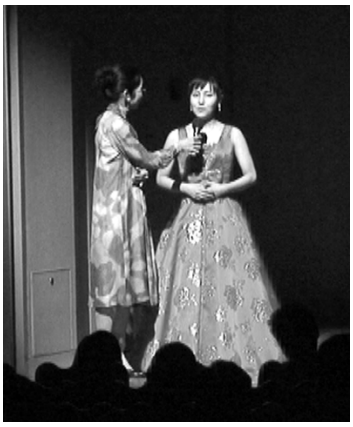
① 北風紘子（ソプラノ）

②高橋健介（ピアノ）

③鎌田亮子（ソプラノ）

④申 恩珠（ピアノ）

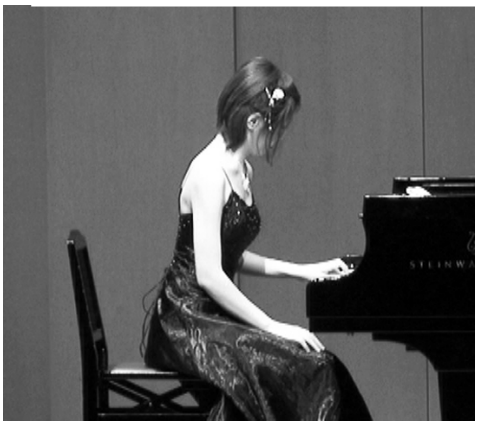
⑤今井梨紗子（ソプラノ）



今井さんにインタビューする
司会の西山淑子氏

⑥六重奏：左より加藤千理(Fl.)、椎野 未花(Ob.)、草間葉月(Pf)
齋藤嵩之(Horn) 、小林香緒理(Fag.) 、誉田未季（Cl.）

⑦坂本久美（ソプラノ）



⑧北村真紀子（ピアノ）

⑨大武彩子（ソプラノ）

⑩鄭 胤先（ピアノ）

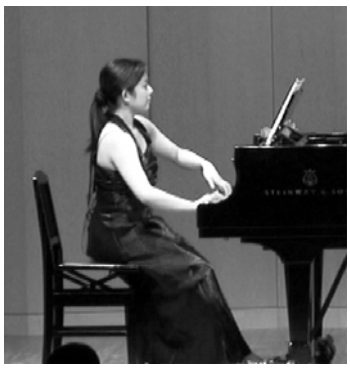
（伴 奏 者 写 真）

稲葉 千恵

前田 明子

渡邊 美文

森田 真帆



齋藤 亜都沙

ステージに飾られた花

第 529 号

音楽の世界

目　次

グラビア　Fresh Concert -CMDJ2011-　2

論壇　石碑の言葉　橘川　琢　4

特集　**19 世紀の社会と文化～リストが活躍した時代～**

リストとその時代～華麗なる遍歴の裏側に～　小宮 正安　6

西洋近代史の中の音楽家たち　中島 洋一　12

長期連載

音・雑記ーひなの里通信ー (38)・・・・・・・・・・・・　狭間 壮　18

名曲喫茶の片隅から (19)・・・・・・・・・・・・・・・・・　宮本 英世　20

音 盤 奇 譚 (24)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　板倉 重雄　22

コンサートレポート

Fresh Concert -CMDJ2011-　中島 洋一　24

作曲部会公演　作曲部会作品展　西　耕一　29

短期連載

明日の歌を　第三回　**上野雄次氏に訊く（2）**　橘川 琢　32

現代音楽見聞記(3)　西　耕一　37

報告：矢澤見どりさんを偲ぶ会　高橋 雅光　39

日本音楽舞踊会議：出版楽譜のご案内・・・・・　高橋 雅光　40

ロシア国立カザン音楽院より留学生募集のお知らせ　浅香 満　44

時評　壊れたパンドラの箱　～原発事故に思う～　中島 洋一　47

CMDJ　会と会員の情報　48

論壇　　石碑の言葉

作曲　橘川　琢

２０１１年３月１１日よりこの８０日ほどの間、多くの情報が流れ、感情が交錯した。この原稿を書いている５月末現在、まだ時折地震があるものの、物流や交通網もかなり回復し、福島第一原発事故の本格的な収束に向けて動きが始まっている。しかし避難所生活を送られている皆様、原発で作業をしている皆様、そして復旧・復興に携わっていらっしゃる多くの皆様を思うと今なお苦しく、気持ちの晴れる事がない。

今回の震災で津波の押し寄せた場所の一つに、岩手県宮古市重茂姉吉がある。明治２９年と昭和８年におきた三陸大津波により、２度の壊滅的な被害を受けたこの地区には石碑が建っている。昭和大津波の直後、姉吉地区の住民らが建立したもので、生存者は明治の大津波では２名、昭和大津波では４名だったという。

『高き住居は児孫（じそん）の和楽　想へ惨禍の大津浪　　此処（ここ）より下に家を建てるな』

前半に都々逸の七・七・七・五の音数律による読みやすい教訓、最後に鋭い警告。実際、今回の津波は石碑の約５０メートル手前で止まり、石碑の教えを守っていた姉吉地区（１２世帯約４０人）では全ての家屋が被害を免れた。（読売新聞　２０１１年３月３０日）

事実を史実として、「昭和大津波があった」「壊滅的被害を受けた」「津波の来る低い場所に家を建ててはいけない」という言葉で、離れた場所において伝えるのも聞くことも確かに大切な事であろう。しかし残された石碑と刻まれた文字は、まさにここで起きた現場の証言であり警告でもある。さらに生き残った人たちの、文字に刻んで置き残した哀しみそのもののようでもある。１９３３年の思いは事実の「情報」以上に、感情と実感のこもった先人の肉声、生きた心の「言葉」として残り、７８年後の２０１１年に児孫の命を救う事となった。

このような石碑や言い伝えは、他にも広範囲にわたって相当数在るという。

また、震災は私たち音楽家・芸術家に対しても大きな試練と問いかけを与えた。それは継続・存続という面だけではなく、さらに深い、芸術の存在そのものへの問いである。「あらゆる芸術の士は人の世を長閑（のどか）にし、人の心を豊かにするが故に尊（たっ）とい」とは夏目漱石の『草枕』の冒頭の有名な一節だが、この惨禍の中、それでも芸術に必要とされた豊かさとは、芸術を必要として頂けた事とは

何であっただろうか。

３月１１日から次々飛び込む、眼を覆いたくなるような惨状。拡大する被害のニュース。余震の続く不安な夜。連日増える犠牲者。安定しない原発の状況。交通や物流網が分断されスーパーやコンビニから物が減り、計画停電の不便が続いた。音楽関連についても、コンサートホールが損傷し、激しい余震が続き交通網も不安定。公演の中止やキャンセル、自粛が行われた。世の音や光が弱くなり、息を殺して静かに状況を見守る日々が続き、音楽家自身この惨禍の前に自身の無力を思い、悔しい思いを吐露する声が聞かれた。

復旧や復興がまだ遠く、苦渋の判断の上コンサートが開かれるようになってきたとき、少しずつ心の音や言葉が聞こえてきた。挨拶で「この状況の中、本当に良く来て下さいました・・・」と声を詰まらせる主催者。「こうして舞台に立てる事の、立てる時が来たということの有り難さ、本当に嬉しいですね。」と、舞台裏で真剣な表情でお話しして下さった出演者。演奏会が日常的に開いていられた日々を取り戻すことが希望になっているという人もいた。そもそもこうして人と会える事が、こうして演奏会で会う事ができ一体感を持てることが何より嬉しいと語る声もあった。

また、演奏会やライブだけでなく、ラジオ等でも震災を境に、多くリクエストを受ける様になった歌もあるという。チャリティ目的の音楽がネット上で多く配信され、励ましの曲が増えてきた。これから現地へ慰問演奏に行く人、被災地へ教えに行く人もいる。音楽の機会が増えるごとに、音楽とともに何かが戻ってくるようでもあった。

私たちはそれぞれの場所や置かれた立場で、音楽や芸術が本当に必要とされ愛されるという事とは何なのかを、この哀しみ深い生命と生活の汀（みぎわ）で目の当たりにし、五感で感じてきた。それまで我々自身、差し出せるものは何か、そして我々が在る意味は何なのかを問い続け、時に迷っていた。そんな中、芸術を、音楽を求めて頂いたということは、どれほど私達を救っただろう。

私たちは哀しみの淵に建つ心の石碑に、震災の教訓と悼む思いを刻み後世に伝えるとともに、芸術に寄せられた思いを期待された希望を、日々の生きた「言葉」として刻み、芸術家の存在意義を問いつつ打ち続けたその鎚音とともに忘れてはならない。

「東日本大震災」はまだ終わっていない。生活の復旧が第一という地域もまだ多く在り、これからもなお一層の支援と復興の手を緩めてはならない。早い再建と回復を期待しつつ、我々自身出来る事を行いつつ見守りたい。

（きつかわ・みがく　本誌副編集長）

特集：19 世紀の社会と文化～リストが活躍した時代～　（1）

リストとその時代　～華麗なる遍歴の裏側に～

文化史　小宮 正安

ヨーロッパを股にかけた演奏活動、行く先々で展開される派手な女性関係…。フランツ・リスト（1811-86）の生涯を通俗的に纏めるならば、「華麗なる遍歴」というキャッチフレーズが当てはまりそうである。もちろん、それが間違っているわけではけっしてない。だが彼がそうした生涯を送った（さらに言えば送らざるをえなかった）背景には、当時の政治的社会的状況が色濃く影響を及ぼしていることも、またたしかなのである。

ナポレオンを巡る毀誉褒貶

リストが生を享けた 1811 年といえば、ナポレオン・ボナパルト（1769-1821）が最後の栄光に浴していた頃である。1789 年に勃発したフランス革命が当初の理想はどこへやら、泥沼の内輪争いに陥った間隙を突いて頭角を現した彼は、「自由・平等・友愛」の革命思想の伝播を錦の御旗に、ヨーロッパ中の「旧弊な」君主国に戦いを挑み続けていった。

特にナポレオンが目の敵にしたのが、中欧に広大な領土を有していた伝統的君主国、ハプスブルク帝国である。彼は、ドイツ語圏の精神的雄であった同帝国の肩書ともいえる「神聖ローマ帝国」を解体させた（ハプスブルク帝国はその後オーストリア帝国と称するようになる）のを手始めに、ヨーロッパの西半分では同帝国の支配者だけに許されてきた「皇帝」の称号を自らも名乗ってフランス皇帝に即位。さらに、時の同帝国皇帝フランツ 1 世（1768-1835）の長女マリー・ルイーズ（1791-1847）を 2 度目の妻として手に入れた。

このような出来事が相次ぐ中、フランス革命に共感を覚える市民階級を中心に、最初のうちこそナポレオンに革命精神の体現者を見ていた人々も、徐々に背を向けてゆく。特にフランス革命に純粋な熱狂を覚えていたルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン（1770-1827）は、失望感を顕わにした典型的な人物だった。現在でも

オーストリアでは殊（こと）ナポレオンとなると、解放者か侵略者かという議論が繰り返し巻き起こるほどである。

ハンガリーの立ち位置

こうした状況の中、リストはライディングという町で生まれる。現在ではオーストリアの一都市だが、当時はハンガリー王国に属しており、そのハンガリー王国はハプスブルク帝国の支配下に置かれている、という複雑な状況にあった。

ハンガリー平原では古くから様々な民族が侵入・定住を繰り返してきたが、10 世紀になると東洋系の騎馬民族マジャル人を中心としたハンガリー王国が成立。ハンガリー語（マジャル語）を母語とし、ヨーロッパとは異なる独自の文化を築き上げた。ところが 15 世紀後半になると、東の強国であったオスマントルコ帝国の圧力を受けて国力が衰退し、16 世紀には領土の東側がオスマントルコに、西側がハプスブルク帝国に分割される。さらには 17 世紀末に至ると、オスマントルコをヨーロッパから一掃しようとしたハプスブルク帝国に、ハンガリー全体がまるまる割譲されることとなった。

これ以降、ハンガリー王国はいわば名ばかりの国としてハプスブルク帝国の中に組み込まれる。国王はハプスブルク帝国皇帝が兼任、公用語は帝国の中心地オーストリアの母語であるドイツ語と化した。さらにリストが生まれたライディングをはじめ、オーストリアとハンガリーとの境にはドイツ系住民が多く、混血も進んでいったため、彼がハンガリー語を解せないという事情も致し方なかった。現在でこそリストという苗字は、ハンガリー語に則り Liszt と書かれるが、当時はドイツ語風の List だったほどである。

メッテルニヒ体制始まる

1812 年、ナポレオンはロシア遠征で大敗北を喫し、それをきっかけに失脚への道を辿る。逆に彼に押さえつけられてきた王侯貴族をはじめとする旧支配階級は息を吹き返し、ナポレオン登場以前の世界を再構築することに躍起になった。

そうした動きの中で、ヨーロッパ中の君主を集めた国際政治会議＝ウィーン会議を催し、ハプスブルク帝国の威光を蘇らせたのが、クレメンス・フォン・メッテルニヒ（1773-1859）である。ウィーン会議当時、彼は外務大臣のポストにあったが、その手腕に皇帝フランツ 1 世から篤い信頼を寄せられ、やがて政界全体を牛耳るよ

うになっていった。

メッテルニヒの政治信条は、反ナポレオン反革命である。政治や思想の自由に目覚めた市民階級を取り締まるべく、彼は検閲の強化や秘密警察の配備を図った。しかもハプスブルク帝国の場合、ハンガリーの例にも見られるように様々な民族を束ねた政治体制であるため、各民族が自由を求めて蜂起するような芽を、徹底して潰そうとした。

こうした状況の中、リスト一家は 1822 年帝都ウィーンに移住する。そしてこの街で、リストはカール・チェルニー(1791-1857)やアントニオ・サリエリ(1750-1825)に学んだり、ピアノの公開演奏をおこなった際に（あくまで伝説だが）ベートーヴェンから祝福を受けたりと多くの実りを得たものの、翌 23 年一家はパリへ引っ越してしまった。メッテルニヒ体制下のウィーンがあまりに不自由だったのが一因であることは、いうまでもない。

ビーダーマイアーのもたらしたもの

メッテルニヒ体制を筆頭に、ヨーロッパ中で保守反動の嵐が吹き荒れる中、政治的自由を束縛された市民は、家族や親しい友人と小さな幸せに浸る道を選ぶようになる。これがいわゆる「ビーダーマイアー」と呼ばれるライフスタイルで、特にその典型的な例が、市民の家庭の広間で営まれる音楽や文学の集い＝サロンだった。

元々サロンは特権階級のみが味わっていた贅沢だったが、この頃になると市民階級もみずからの富を基盤に、そうした贅沢を享受できる余裕を手に入れつつあった。さらに言えば、かつてのサロンではプロ顔負けの腕前を持つ特権階級が自らの芸術的才能を客人に披露するということが度々おこなわれており、これもまた市民のサロンに受け継がれた。

このような人々は「ディレッタント」と呼ばれ、金のためではなく純粋な愛情ゆえに芸術に奉仕する高貴な精神の持ち主と考えられていた。ということは逆にプロの芸術家として名を馳せたいと願う以上、ディレッタントが太刀打ちできないような能力や技巧を発揮する必要があるだろう。音楽の世界においてそれは、超絶技巧であった。

若き日のリストがピアノの名手として超絶技巧を売り物にした背景にも、ディレッタントとの差別化を図ろうという狙いがあったためである。さらに差別化ということで言えば、サロンの寵児となるだけでなく、大規模な公開演奏会の場で勝負に

出、大向こうを唸らせる業こそが名声を確立するために不可欠であり、リストはこれにも成功して女性ファンから騒がれるアイドル的存在となってゆく。

「フランス国民の王」の下で

ところで、リストにとって新たな活動の拠点となったパリでも、メッテルニヒ体制下のウィーンほどではなかったにせよ、思想言論について厳しい統制がおこなわれていた。ナポレオン失脚後、フランス革命で処刑されたルイ 16 世（1754-1793）の弟に当たるルイ 18 世（1755-1824）が国王として権力の座に返り咲いたのを皮切りに、彼の跡を継いだ弟のシャルル 10 世（1757-1836）が絶対主義の復興や議会の解散をおこなうなど、旧態依然たる王政復古の時代が幕を明けていたのである。

そのような状況に不満を抱いた市民階級は、1830 年に再び革命を起こしシャルル 10 世を追放。大資本家や銀行家といった富裕な市民層が中心となり、穏健派の貴族ルイ＝フィリップを王として擁立した。ルイ=フィリップは、あくまで国民のための統治者であることを強調すべく「フランス国民の王」を名乗り、立憲君主制を打ち立てるなど、市民の自由を認めることで却って彼らの活動が盛んになるような政策を打ち出した。

こうしてパリを中心にフランスでは、裕福な市民を中心に経済産業が活気づき、好景気の幕が切って落とされた。サロンもこれまで以上に充実を見せ、華やかさを増してゆく。そうした中でもパリ中の VIP が集うような有名サロンを切り盛りしていたのが、一時リストの内縁の妻となったこともあるマリー・ダグー伯爵夫人（1805-75）であった。

コスモポリタン生活の真実

このように経済的繁栄をフランスが謳歌できた背景には、リストのような外部の人間を積極的に受け容れた結果、彼らによる一層の経済発展がもたらされたことが挙げられる。いっぽうハプスブルク帝国では、1830 年のフランスでの革命などほとんど何の影響もないまま、メッテルニヒ体制が強固に存続していた。

とはいえ、帝国の支配下に置かれた様々な地域や民族の不満が消えたわけではない。特にハンガリーでは民族独立への思いがくすぶり、メッテルニヒは神経を尖らせた。メッテルニヒ体制下でも大目に見られていた音楽の分野においてすら、反ハプスブルクを訴えたハンガリーの英雄ラーコーツィ・フェレンツ 2 世（1676-1735）

を讃える作者不詳の曲＝『ラーコーツィ行進曲』は、演奏禁止にされた。（リストもこのメロディに基づきハンガリー狂詩曲第 15 番を作曲するが、それは音楽を通じた密かな反メッテルニヒ宣言でもあった。）

それでもリストはハプスブルク帝国に度々戻り、ウィーンで演奏会を催して好評を博する。だが常に官憲からは嫌疑の目を向けられ、不自由な思いを強いられた。当時危険な革新思想と見なされていたクロード・アンリ・サン＝シモン伯（1760-1825）等の考え方に共鳴していたことも、体制側から不興を買う一因となった。リストにとってみれば、もしも自由な生き方をしたいと願うなら、いきおいパリを軸足にヨーロッパを経巡るようなコスモポリタン的生活しかありえなかったのである。

ワイマール招聘の意味合い

そんなリストのところに 1842 年、ワイマール公国から宮廷歌劇場楽長就任の誘いが舞い込んできた。ワイマール公国は政治形態としてはハプスブルク帝国と同様の君主国だったが、ヨーロッパの君主国の中でもリベラルな国として知られていた。何しろ 1816 年の時点で、他のドイツ諸国に先駆け初めて憲法が制定されたほどだったのである。

リストをワイマールへと招聘したのは、ワイマール公妃マリア・パヴロヴナ（1786-1859）。歴代ワイマール公国の支配者のひそみに倣い、「文化国家」としての名声をヨーロッパ中にとどろかせたこの国をさらに充実させようと考えた彼女は、リベラルな生き方と豊かな芸術性で広く知られたリストに白羽の矢を立てたのである。

こうして、ワイマール公国に落ち着いたリストだが、その 7 年後、彼のもとに逃れてきた 1 人の男がいた。彼こそは、前年にヨーロッパ中で勃発した革命に参加したかどでお尋ね者となったリヒャルト・ワーグナー（1813-1873）。後に親戚関係を結ぶこの二大音楽家は、ともに流浪の末ワイマール公国に至るというルートを辿ったのだった。

なおこの時の革命はハプスブルク帝国にも及び、さしものメッテルニヒ体制も崩壊。新たな皇帝としてフランツ＝ヨーゼフ（1830-1916）が支配者の地位に就くものの、最初のうちは革命後の混乱を沈静化すべく戒厳令を敷いたり、ハンガリーをはじめとする各地の民族運動を鎮圧したりと、強硬姿勢が目立っていた。

回復されたハンガリー

ところがフランツ＝ヨーゼフも、単なる強硬姿勢では立ち行かなくなる。ハプスブルク帝国の弱体化を狙う周辺諸国の動き、帝国内の各所起こる民族独立の声…。内憂外患の打破を念頭に、彼は帝国を近代的国家に生まれ変わらせるべく帝都ウィーンの都市改造を決断し、国内情勢の安定化を図ろうと特定の民族と手を組む道を模索する。

結果、1867 年に誕生したのがオーストリア＝ハンガリー帝国。帝国への不満を顕にしていたハンガリーの自治権を、逆に大幅に認めるのが狙いだった。（ただしこれは、帝国内における他の民族の不満を更に煽ることとなってしまう。）

こうしてハンガリーはハプスブルク帝国の一部を形成しながらも、帝国の中心であるオーストリアとほぼ同等の権利を有し、昔日の輝きを取り戻してゆく。首都のブダペストはウィーンもかくやという近代的都市へと生まれ変わり、芸術文化の活性化を目指して王立音楽院も創設されるという盛況ぶりだった。

この音楽院こそ、現在リスト音楽院と呼ばれているものである。リスト本人が音楽院の創設に尽力したことから、この名前が付けられた。そうでなくても彼は 1861 年にワイマールにおける楽長のポストを辞した後、ローマとブダペストの 2 都市に居を構え（後に再びワイマールも加わる）、それらを活動の拠点にしていった。

リストが息を引き取ったのは 1886 年。放浪の人生そのままにバイロイト音楽祭を観劇しに行った先での客死であり、亡骸もこの町に葬られた。

19 世紀前半のハプスブルク帝国の音楽事情については、拙著『モーツァルトを「造った」男　ケッヘルと同時代のウィーン』（講談社現代新書）も併せてお読みいただけると幸いです。

（こみや・まさやす　横浜国立大学　准教授）

【著者略歴】小宮 正安

東京大学大学院人文社会系研究科修了。現在、横浜国立大学教育人間科学部人間文化課程准教授。著書に『モーツァルトを「造った」男　ケッヘルと同時代のウィーン』（講談社現代新書）、『愉悦の蒐集ヴンダーカンマーの謎』（集英社新書）、『ウィーン　多民族文化のフーガ』（大修館　共著）など多数。脚本に『狂言風オペラ〈魔笛〉』等があり、日本ならびにドイツで上演されている。

西洋近代史の中の音楽家たち

作曲 中島 洋一

かなり乱暴な試みですが、ベートーヴェン、ショパン、リスト、ワーグナーなどが芸術活動を繰り広げた西洋近代の歴史を、駆け足で辿ってみたいと思います。歴史学上、近代とは通常フランス革命から第１次世界大戦までの約 120 年の時代をさします。近代は 1848 年のフランス二月革命を挟んで、前期と後期に分けることが出来るでしょう。その時代を一口で表現すると、市民が文化の担い手になって行く時代ということではないかと思います。

１）フランス革命　（自由・エゴの解放・迫害）とナポレオンの台頭

フランス革命というと「自由・平等・博愛」を表していると謂われている三色旗で知られていますが、私は「自由・エゴの解放・迫害」などとひどい表現をしてしまいました。18 世紀になると啓蒙思想の影響もあり、高い教育を受けた有能かつ経済力を持つ市民層が育って行きます。また、医療や農業技術の発達により、農村の人口が増え、そういう人達が職を求めて大量に大都市に流れ込んで来て、パリなどの大都市は人口過剰になってしまいます。抑圧された苦しい生活の中、自己の権利に目覚めた民衆たちは、王侯・貴族・僧侶などの特権階級を相手に、自分達の権利拡充を求めて行きます。そしてついに、1789 年にフランス革命が勃発します。しかし、民衆といっても、高い教育を受けた富裕な市民層と、その日のパンにもこと欠く下層民衆（プロレタリアート）では利害が異なります。1791 年に一応最初の憲法が発布されたものの、その後は血で血を洗う凄まじい権力闘争に突入し、フランスは国力弱体化の危機に見舞われます。

そのような状況の下で救世主として現れたのがナポレオンです。ナポレオンはイタリアやスイスに共和国を建設するなど、武力で革命的政策を推進し、フランスの領土を広げて行きます。フランス以外のヨーロッパの市民たちも、最初の頃は、市民を封建権力から解放し、市民のための社会をもたらしてくれる英雄として、彼を歓迎したようです。ベートーヴェンなどもそうだったようで、交響曲第三番『英雄』は、もともとナポレオンを讃える曲として手がけられたものです。

ベートーヴェンの貴族嫌いは有名です。例えば、1812 年にゲーテとベートーヴェンが連れだって散歩していた際、オーストリア皇后が貴族や延臣達を引き連れて現れると、詩人のゲーテは道を譲り丁寧に挨拶したのに対して、ベートーヴェンは「彼

等の方が道を譲るべきなのです。断じて我々が譲ってはなりません。」と言って、貴族達の中に割り込み、流星のように突破した、というエピソードが残っています。（ロマンロラン著『ゲーテとベートーヴェン』）ベートーヴェンにとっては、必ずしも高邁な精神の所有者でもない貴族階級の人々が、自分より社会的地位が高く、自分を見下していることが、大いに不満だったようです。

ところで、ナポレオンに話を戻しますが、いくら革命を掲げて戦ったといっても、フランス以外の国民からみればナポレオンはやはり侵略者です。やがて各国が協力してナポレオンと敵対するようになります。チャイコフスキーの大序曲「1812 年」で有名なロシア侵攻に失敗すると、ナポレオンは次第に勢いを失い、没落して行きます。

２）反動的時代の到来　～それでも市民文化は育って行く～

1814 年にナポレオンが戦いに敗れ退位すると（ナポレオンは 1915 年にエルバを脱出し権力を再奪取し 6 月、ワーテルローの戦いに敗れたのが最後の戦いとなる）1814 年 9 月～1815 年 6 月にかけてナポレオン戦争の戦後処理をめぐってウィーンで会議が開かれます。そこで主導権を握ったのが、ウィーンの老獪な政治家メッテルニヒでした。

ウィーン会議以降、フランス革命以前の旧体制が復活します。そして政治的集会、発言などは弾圧され、「自由、権利、平等」などという言葉は、声を潜めてしか言えなくなりました。市民達は政治的発言を控え、ワルツを踊ったりして憂さ晴らしするようになりました。そういった空気の中で、ベートーヴェンの重厚で壮大な音楽は敬遠されるようになります。この頃、ウィーンで流行っていたのは、ロッシーニのオペラ・ブッファだったそうです。そのような状況だったので、ベートーヴェンは第九交響曲のウィーン初演を一度は諦め、ベルリンでの初演を計画したのですが、ベートーヴェンの新作を心待ちにしていた人々からの嘆願書があり、ウィーンで初演することを決意します。

1827 年 3 月 26 日、ベートーヴェンは没しますが、29 日に行われた葬儀にはなんと 2 万人の参列者があったそうです。当時としては驚異的な人数です。シューベルトをはじめ、ウィーンの音楽家の殆どが参列したそうですが、参列者の多くは一般市民だったことでしょう。「ベートーヴェン先生は、音楽を通して我々に勇気と慰めを与えてくれた。みんなで天国に送ってやろうよ。」参列した市民達には、そのような想いがあったのではなかろうかと想像しております。

ベートーヴェンのような強烈な自由主義者にとって、メッテルニヒは不倶戴天の敵だったことでしょうが、政治的自由が封じられた彼の統治時代においても、市民文化は確実に育って行きます。特筆すべきはメッテルニヒの巧みな外交政策もあっ

て、この時代には大国間の戦争が起こらなかったことです。そういう中で、生活に余裕を持ち始めた上層市民達は、つつましやかながらも、好みの調度品を揃えたり、音楽サロンなどを開き、自らも音楽を演奏して楽しんだりしたようです。シューベルトなどは、子供の頃読んだ教科書では著しく貧乏だったように書かれていますが、実際はそれほどでもなく、自分の音楽を理解する友人達にも恵まれ、一緒に美味しい物を食べたり、音楽を奏でたり、文学について語り合ったり、それなりに楽しい時間を過ごしていたようです。

しかし、市民達は、言論や行動の自由が認められない体制の下で、心のどこかに胸がつかえるような想いを抱いていたのではないかと想像します。

３）新しい時代に向かって

1789 年のフランス革命により自由を知った人々が、いつまでも反動的体制を受け入れ続ける筈はありません。1830 年 7 月にはフランスで革命が起こり、3 日間のパリ市街戦の末、ブルボン王政が崩壊し、ルイ・フィリップを王とした立憲君主制のもと、ブルジョワジーの権利が大幅に認められた新しい体制がスタートします。ベルリオーズ(1803-1869)は多感な青年時代に 7 月革命を体験しており、1837 年にはフランス政府から委嘱を受け、7 月革命の犠牲者のために、「レクイエム」を作曲しています。また、1830 年にはポーランドでもロシアの支配に不満を抱いた市民が蜂起し、国民政府を樹立しますが、翌年鎮圧され、失敗に終わります。祖国の悲しい現実が、ショパンの内面に陰を落とし、創作に影響を与えたことは間違いないことと思います。

そして、ついに 1848 年 2 月、今度は労働者階級が蜂起し、フランス 2 月革命が勃発します。革命は鎮圧されますが、それはヨーロッパの各地に飛び火し、3 月 13 日にはウィーンで、18 日はベルリンで革命が起こり、多くの国々、そして民族に広がって行きます。ウィーンで革命が起きたことで、メッテルニヒは失脚し、一時イギリスに亡命します。また、その年の 2 月 21 日 には、マルクスとエンゲルスが「共産党宣言」を発表しています。またショパンは、翌年の 1849 年に没しています。

これらの革命の波は音楽家たちにも少なからぬ影響を与えたようです。ワーグナーは 1849 年、ドレスデンで起こったドイツ 3 月革命の革命運動に参加し、またマルクスの友人である社会主義者のゲオルク・ヘルヴェークとも親交を結んだようです。しかし、革命は失敗し、ワーグナーは指名手配され、リストを頼ってスイスに亡命します。しかし、ワーグナーが一貫性のある革命思想を抱いていたとは到底思えません。彼が、後にバイエルン国王、ルートヴィヒ 2 世の庇護を受け、自分のためにバイロイト祝祭劇場を作らせ、自分の芸術を完成させて行ったことは周知の通りです。

1848 年の革命は一時的には失敗しますが、国家主義、民族主義、社会主義などの思想を育み、19 世紀後半から 20 世紀に引き継がれて行きます。

４）個の解放がもたらしたもの

近代前期は、産業革命の時代です。そして、この時代は新しい楽器が発明されたり、従来からある楽器が大幅に改良された時代でもありました。1828 年、ウィーンで創業されたベーゼンドルファー社のピアノは、リストとともに発展して行ったようなものです。ベーム式のキーシステムは、木管楽器の演奏能力を大幅に拡大し、バルブを伴った金管楽器の出現は、それまでは困難だった半音階的動きを容易にしました。

また、多くの市民が音楽を楽しむようになったことで、広いコンサートホールを必要とするようになり、管弦楽の楽器編成も規模が大きくなって行きます。

技術革新が音楽的表現力の拡大に貢献した部分も大きく、ピアノの発達は、リストのような偉大なヴィルトゥオーソを育んだともいえましょう。

そのような技術革新をもたらした背景には、自由、平等の理念を拠り所にした、個の解放があったと思います。近代の政治改革を経て私的所有権の保証、労働の自由などの権利を獲得した市民達は、新しい技術を開発し、生産性を上げ、お金を沢山儲けることが出来るようになりました。一方、生産を増やすためには、労働者を雇わなければなりません。その時代には、ろくな教育も受けられず生きるのがやっとといった貧しい人達が大勢存在しました。そういう人達を安い賃金で働かせることで、更なるお金儲けが可能になったのです。しかし、そこからは俗悪な物質主義も生れました。そして多くの芸術家たちは、俗悪な物質主義に反発し、自分の理想を追い求めます。この時代はロマン主義芸術を生みますが、強引に定義すると、ロマン主義精神とは、現実からの逃避ではなく、現実に対して闘いを挑む精神ではないかと私は考えています。それは、あるときは日常性を越えた幻想の世界へ潜り込み、あるときには精神の自由を求めての闘いとなります。ロマン主義はやがてリアリズムに引き継がれます。ロマン主義とリアリズムでは、理念的に正反対で継続性がないように見えますが、現実社会の矛盾を暴こうとするリアリズム芸術も、現実に対して闘いを挑むというあり方において、繋がっているのです。

では音楽史上において、ロマン主義の扉を大きく開いた音楽家は誰でしょうか。それはやはりベートーヴェンでしょう。ベートーヴェンは、ロマン派の作品にときおりみられる無秩序で構造性の希薄な音楽を嫌いましたが、彼の作曲形式上の発展拡大は、彼の音楽表現の発展拡大と密接に結びついています。ベートーヴェンこそ、自由を求め、そして自己の芸術表現を求めて、一生闘い続けた音楽家であり、ロマン主義音楽の扉を大きく開いた人でしょう。

また、この時代になると、才能を持ちながらも、その時代の人々になかなか受け入れられず、苦しい生活を強いられる若い作曲家たちが多く現れます。そういう人たちを積極的に支援したのが、19 世紀音楽界の帝王：フランツ・リストでした。後に大家になった作曲家たちが若い頃にリストに支援を求めて書いた手紙が、いまでも残されています。

５）1848 年以降の社会と音楽家

フランスでは 1848 年、ナポレオンの甥ルイ・ナポレオンが大統領に選ばれ 1852 年には皇帝の座につきますが、71 年 1 月には普仏戦争で敗れ失脚し、帝政は終わりを告げます。同年 3 月 26 日にはパリで市議会選挙が行われ、28 日にはパリ・コミューン（自由都市パリ）が宣言されます。75 年には第三共和制憲法が設定され、本格的な共和制の時代に入って行きます。

オーストリアでは、1848 年 3 月ハプスブルク統治下にあったミラノが蜂起します。しかし、8 月にはヨハン・シュトラウス一世が作曲した「ラデツキー行進曲」で有名なラデツキー将軍によって鎮圧されてしまいます。それから約 10 年後の 1859 年に、ハプスブルク帝国はフランスの援助を受けたサルデーニャ王国と戦い敗れ、ミラノなどを失います。1861 年にはサルデーニャ王国のエマヌエーレ 2 世と首相のカヴァールの働きによってイタリア王国が成立します。歌劇作家ヴェルディは(Verdi)苗字の頭文字が、［**V**ittorio **E**mannele **R**e **D'I**taria］（サルディニア王ヴィットリオ・エマヌエーレを讃えて）となることもあり、イタリア統一運動の象徴的存在になり、歌劇『ナブッコ』の合唱曲「行け、わが思いよ、金色の翼にのって」は、当時イタリア中で愛唱されたそうです。つまり、ハプスブルク帝国とヴェルディは敵同士だったことになります。ヴェルディはその功績が認められ、国会議員に選出されます。

民族融和を掲げ、多民族をまとめあげて来たハプスブルク帝国でしたが、自治権を要求する民族主義運動を抑え続けることが出来なくなり、1867 年にはハンガリア人の自治権を認めたオーストリア＝ハンガリー帝国が成立します。

また 1871 年にはプロイセン国王をドイツ皇帝に仰ぎ、ドイツ帝国が成立し、バイエルン王国は王国の名前は残したもののドイツ帝国の 1 領邦になります。それが直接の原因ではないでしょうが、バイエルン国王ルートヴィヒ 2 世は、国政を顧みず、ワーグナーのバイロイト祝祭劇場や、度重なる築城に膨大な国費をつぎ込み、国家財政が危機に瀕します。そういうことからルートヴィヒ 2 世は信を失い、廃位となった後、謎の死を遂げます。

この時代は、国家主義、民族主義が強まった時代で、チェコのスメタナやドヴォルザーク、グリンカ、ロシア五人組など国民楽派と云われる人々が活躍します。しかし民族主義の高まりは西・中央ヨーロッパの国々も例外ではありません。フラン

スにおけるグレゴリオ聖歌の再評価（フォーレ、ドビュシーなどの作曲家は好んで自作品に教会旋法を導入している)、ゲルマン、ドイツの伝説を題材にしたワーグナーの楽劇なども、そのような傾向と関連性があると思います。

ところで 1861 年のイタリア統一、1871 年のドイツ帝国成立の歴史年表の間に1868 年の日本の明治維新が挟まります。この頃は国家主義、民族主義が高まりをみせた時代で、それは自国の国力と権益を拡張しようという動きと連動しています。つまり弱い国は、下手をすると大国の食い物にされかねない状況にあったのです。そういう外圧の中で、日本は開国し近代国家の仲間入りをします。そして、欧米諸国の予想に反し、日本は急速に近代化し、欧米の列強に追いついて行きます。欧米人を驚かせた我が国の急速な近代化をもたらした要因の一つは、江戸時代の町人文化の蓄積にあったと思います。読み書きが多くの民衆の間に浸透し 19 世紀中頃の日本人の識字率は、西洋諸国のそれよりかなり高かったほどなのです。

19 世紀後半は、市民社会がさらに成熟して行った時代です。成人男性のすべてが参加出来る普通選挙法が徐々に浸透して行き、労働者階級にも参政権が与えられ、19 世紀前半に比べれば、労働者階級の生活も改善されて行きます。

その一方、ブルジョアジーもより文化的に成熟し、チャイコフスキーのパトロンとなったメック夫人や、東洋美術館を設立したエミール・ギメ(1836～1918）のような人物も現れます。また、交通機関の発達で、世界は次第に狭くなって行き、非西洋圏の芸術作品や工芸品などと比較的容易に接することが出来るようになります。1851 年に開催されたロンドン万国博覧会を皮切りに、世界中の民芸品や物品を集めた博覧会が開かれるようになります。そういう中で日本の浮世絵や、伝統工芸品などが芸術家を含む欧米の人々の関心をかうようになって行きます。世界は狭くなり、よりグローバル化して行きますが、その一方、国家主義、民族主義的傾向が強まり、やがてそれが火種となり、大きな戦争（第一次世界大戦）に突入します。

これで今回は筆をおきますが、西洋近代史や文化史について造詣の深い方々からみれば、私の文は浅く、そして軽く感じられたかもしれません。しかし、音楽家に限らず、人間は常にその時代と向かい合って生きており、それは「いま」の時代を生きる我々も同じでしょう。そして「いま」という時代は、過去からの連なりがあって存在するものなのです。今まで歴史、文化史にそれほど関心を持たれなかった方々も、この文を読むことで、過去からの連なりをあらためて見直すキッカケとしていただければ、幸いに存じます。

（なかじま　よういち　本誌　編集長）

連載　音・雑記－ひなの里通信（38）　狭間 壮

生き方をも問われる夏に

築40年の高層集合住宅の１室を売却した。１年前のこと。今どき１４階建てを高層とはいわないだろうが、部屋は７階にあって、かつて私の両親が暮していた。東京の新宿、静かな住宅団地の中の１棟。時どきに手を入れながらそれなりに快適に暮していたようだが、使用電力の許容量は少なく、15A（アンペア）が上限であった。

15A は少ない。オール電化なぞは夢物語の許容電力量だ。それでも老夫婦の暮しはその範囲内でまかなわれていた。ブレーカーが落ちないように気を使いながら。

譲りうけたその部屋を、私は音楽ができるように防音工事をし、使用電力量を増やし手をかけて改造したのであったが、長期にわたる熱心な売却の申し入れに根負けして手放したのだ。手元には改造にかけた経費にいくばくかの売却益がプラスされたものが残ったが、よりどころを失ったような少々のさびしさと悔いも残したのだった。

この集合住宅の地域、もとはと言えば戦後復興の仮設の住宅団地であった。それが20年後に取り壊され、再開発ということに。その中の１棟が分譲されて、その１区画に両親は入居したのだ。

先の仮設の住宅は戦後の焼野ヶ原に急造されたもので、私たち家族は縁あってここに落ち着くことになった。その頃(昭和 23年～)、1軒の使用電力許容量は、7A ぐらいのものだったか。

電化製品といえば、ラジオと電熱器とトースターぐらいしか思い浮かばない。それに部屋の電灯数ヶ所、父の机上に電気スタンドがあった。7A で間に合ったのだ。

ある日、居間に蛍光灯がついた。夕方の室内が昼間のようになった。それは100W の電球２ヶよりも更に明るく感じられて、その白い光りに胸が踊った。

となり近所より少し早目の蛍光灯の取りつけを珍しがって、近所の遊び仲間の子ども達がのぞきにきた。ガラス窓の向こうに、いくつもの顔がならぶ。

それらのことどもは、蛍光灯一つで、わが家に明るい未来が約束されたかのような高揚感をもたらした。そしてそれは少年の日の面映くもうれしいできごとであったのだ。

その後上向きの経済に支えられて、洗濯機、テレビジョン、冷蔵庫と家電が次々と生活を潤し、電化生活への欲望はますますふくらんでいくことに。

電力は経済活動の大動脈となり、電力受容を満たすとの大義名分は、原子力発電を推進する国策となっていったことは周知のことだ。

電気は大事に使う、の思いはいつしか失せて生活は一変、オール電化が喧伝されるようになった。エネルギーは「クリーンな原子力」へと、将来は原発 50％に頼ることにも。そこに東日本大震災が起こったのだ。

この大震災は、地震と津波の被害に、原発の事故が重なったことで、その悲劇をさらに複雑なものにしてしまった。百万言を

費しても語り尽くせぬ大震災の惨状に加えての、福島原発の事故。毎日伝えられるその様子には言葉を失う。

原子力の平和利用、クリーンで安全な原子力発電。原子力の安全神話にいつしかならされ洗脳され、その神話の中で便利な電化生活に身をまかせるままになっていた。原子爆弾と原子力発電は別のものと思いこんでいた。あらためて辞書を引くと、「核分裂による熱で水蒸気を発生させ、蒸気タービン・発電機を回して発電すること」とあるではないか。一気に爆発させるか、徐々にコントロールしながら核分裂させるかの違いで、本質は同じであったことにも初めて気づく。安全と言うなら「原発は東京に！」と警告を発する本があったことを思い出した。

かつて私は「原爆を許すまじ」と、反核への思いを歌ってきた。そして近年「一本の鉛筆」にその願いを託して、平和コンサートを続けてきた。原爆と原発を別のものとして。無知である。

放射能に汚染される空気、田畑、そして海を、次代に残してならぬのは自明のこと。「青い空は/青いままで/子どもらに/伝えたい―小森香子―」のだ。私にできることといえば脱原発をかかげ節電に励むことぐらいか。

蛍光灯の明かりに感動した 60 年前がなつかしい。そういえば、その頃の蛍光灯は、スイッチのヒモを引いてからパイロットランプがつき、ややあって本体がついた。点灯まで「間」があったのだ。その「間」から、反応のにぶい人を称して、「蛍光灯」と、からかうことがあった。そんなこともついでに思い出す。

目の前に暑い夏がある。冷房機にたよらずに＜月に柄をさしたらばよき団扇かな＞と、床几(しょうぎ)を出しての夕涼みや、窓や戸を開けはなち蚊帳を吊っての暮しはどうだ？それに「かき氷」や、井村屋の「あずきバー」や「ガリガリ君」も総動員して、のりきる。ちょっと難しいかな。しかし、これまでの生き方を考えさせられる夏になることはまちがいない。

浜岡原子力発電所の運転停止要請。原子力を含めたエネルギー政策の見直し。政府の発表を、ラジオが伝えている。

【筆者紹介】狭間 壮(はざま　たけし)：中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中ＮＨＫ「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。

連載 名曲喫茶の片隅から

宮本 英世

〔第 19 回〕作曲家たちの意外な趣味

クラシックの作曲家というと、とかく私たちとは違う天才たち、別世界の人種のようなイメージがなくもない。だから恐れ多くて近づけないという人がいそうだが、しかし作品を離れて人間像を調べてみると、案外俗っぽい、私たちと変らない話がいくらでも出てくる。例えばケチだった割りには計算に弱かったベートーヴェンとか、従妹を相手に下品なスカトロジー(糞尿譚)を残しているモーツァルト、食いしん捧として有名だったロッシーニなどは、クラシック・ファンなら知っている人が多いに違いない。

そればかりでなく、音楽以外の趣味にも相当の関心を示した、玄人はだしの腕をもっていた、という人もじつに多い。もしかしたら別の道が開けていたかもしれないこの「趣味」が、どんなものであったか、代表的な作曲家について、ちょっと覗いてみよう。

メンデルスゾーンの自筆画

まず音楽とは最も関係の深い「絵画」。絵を描くことに才能を発揮したのは、メンデルスゾーン、ショパン、シェーンベルク、ガーシュウィンらである。銀行家の家庭に育ち、専門家(ベルリン工科大学教授 J.レーヴェル)にも師事したというメンデルスゾーンの腕前は、残された風景画やスケッチを見てもかなりのもの。繊細でのびのびとしたタッチが特色である。

一方ショパンも風景画を遺しているが、それ以上に得意だったのは似顔絵と漫画である。リンデンという校長先生を描いた似顔絵などは傑作の誉れ高く、少年時代はこの画才によって仲間たちの人気者だったという。

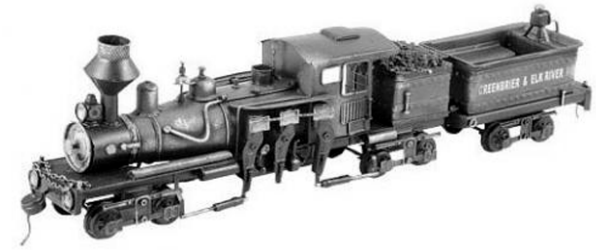
シェーンベルクの絵は 33 歳ごろから始めたもので、写実的なもののほか、抽象画にも手を広げ、表現派の巨匠カンディンスキーも舌を巻くほどであったという。

ガーシュウィンもまた、プロ級の腕前をもっていたといわれるが、乗馬そのほかにも趣味があったため、気分転換のためだけに終り、結局働きすぎて、39 歳で亡くなってしまっている。

次に、男性なら誰もが一度は興味を持ちそうな「乗物」。これを趣味にしたのは、ドヴォルザーク、オネゲル、ヒンデミット、プッチーニである。

ドヴォルザークとオネゲルのそれは、SL(蒸気機関車)で、8 歳頃、生家のすぐ近

くに鉄道が敷かれ、轟音をあげて走る力強いSLの姿に魅せられたドヴォルザークは、以来晩年にいたるまでSLに関するさまざまな情報（型番、時刻表、運転手名など）を覚えるのを、何よりの楽しみにした。1892年にニューヨークに招かれ、ナショナル音楽院の院長を務めた時にもそれを続け、自身で駅に行けない時には弟子を代わりに行かせたというから、相当なものである。一方、オネゲルも同じことをやって楽しんだ上に、管弦楽によるSLの描写曲「パシフィック231」を書いている。



ヒンデミットもまた機関車が趣味だったが、ドヴォルザークらの本物と違って、こちらは模型機関車のコレクションである。あれこれと相当な数を集めたらしく、わざわざそのための部屋まで作ったという。

プッチーニの乗物というのは、自動車とモーター・ボート。「マノン・レスコー」(1893年)以来、「ラ・ボエーム」「トスカ」「蝶々夫人」などの成功により、まず手に入れたのは自動車。新車が出ると次々に購入し、独特の運転服(防疫夫が着るような白い上っ張り)を着、水中メガネのような眼鏡をかけて得意そうに乗り廻したらしいが、事故もたびたび起こし、1903年（44歳）には危うく死にかけたという。その一方、モーター・ボートも次々と買いもとめ、船団を組めるほど揃えていた。こちらは1907年にアメリカへ行った時、あるマニアに求められてサインしたところ、モーター・ボートを買ってもお釣りがくるほどの謝礼を貰ったのが、きっかけだという。

そのほか、リヒアルト・シュトラウス、ヴェルディは、登山と庭いじり。シベリウス、ディーリアスらの畑仕事とともに、自然派の作曲家たちといってよいだろう。それから趣味といえるかどうか、ギャンブルが大好きだった作曲家として、パガニーニ、チャイコフスキー、リヒアルト・シュトラウス、ヴェルディらの名も挙げておいてよいかもしれない。これについては、いずれ検証しようと思う。

【宮本英世氏プロフィール】1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア（洋楽部）、リーダーズ・ダイジェスト（音楽出版部）、トリオ（現ケンウッド）系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」（東京・池袋）の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」（音楽之友社）、「クイズで愉しむクラシック音楽」（講談社）、「喜怒哀楽のクラシック」（集英社）など多数。

【連載】

音盤奇譚

板倉 重雄

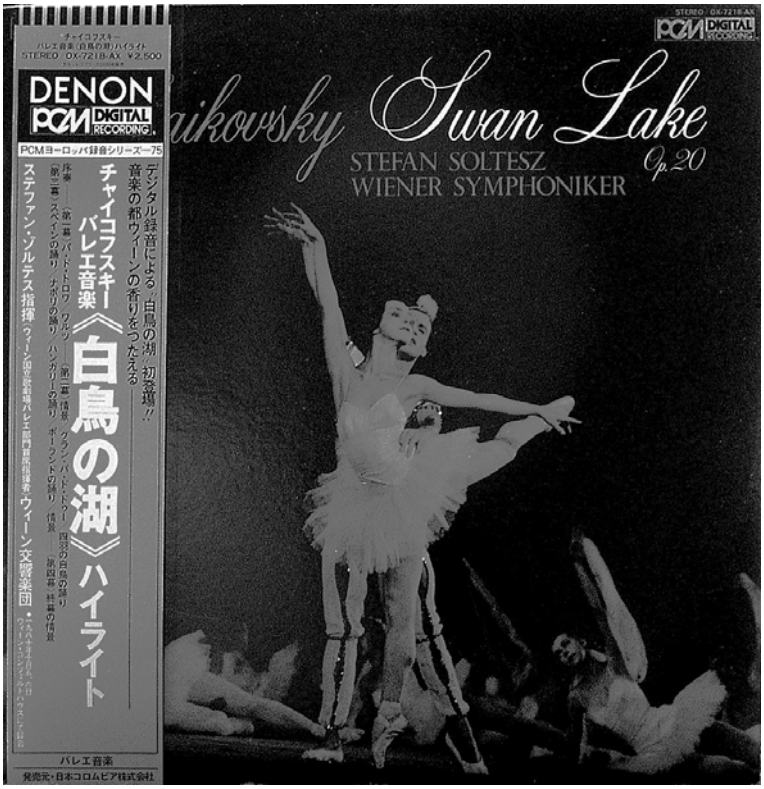
第 24 回
サロメ再発見

2 月 22 日から 26 日にかけて行われた二期会の「サロメ」公演は、エロ・グロ趣味に包まれていた従来のサロメ像を覆し、結果リヒャルト・シュトラウスの音楽の美が強烈に身に迫ってくる見事な公演だった。その第 1 の立役者は演出のペーター・コンヴィチュニーである。大胆な読み換え演出で賛否両論を巻き起こす彼だが、ここでも舞台は紀元前後のエルサレムから現代の核シェルターに置き換えられ、「最後の晩餐」そっくりのテーブルに登場人物は並ぶ。そして近く訪れる滅亡を前に、同性愛、近親相姦、暴力、ドラッグなど退廃的な生活に興じている。異邦人ヨカナーンは「最後の晩餐」のキリストの位置に座り、女や肉体を敵視する西洋的哲学観、宗教観の持ち主として描かれる。そんな異邦人を愛するのが王女サロメ。「サロメの踊り」もコンヴィチュニー演出では登場人物の心理描写となり、ヨカナーンの首は、古い哲学観、宗教観に凝り固まったヨカナーンの象徴となる。サロメの歌詞「愛の神秘は、死の神秘よりもはるかに大きい」こそが、このオペラの本質なのだとコンヴィチュニーは問いかける。ラストはサロメと、過去の自分と決別したヨカナーンの解放感溢れる愛の成就となり、二人は手を携えて舞台下手へ逃れてゆく！

今回の演出で浮かび上がったのは、「サロメ」の音楽の抒情性、官能性、優美さである。ゾルテス指揮東京都交響楽団は、繊細な表情と艶やかな色彩をもち、かつ引き締まった演奏を行った。このサロメを聴いたあと家にある LP を聴くとあまりの違いに愕然。ライナーは迫力万点だが優美さ不足、カラヤンの名盤も急に厚化粧に感じられるようになって困った。旋律の優美の歌といい端正な運びといい一番近いのはクレメンス・クラウス指揮ウィーン・フィルの 1954 年録音。思えばクラウスはシュトラウスの盟友である。クラウスも作品の本質を「愛の神秘は死の神秘よりもはるかに大きい」と見抜いていたに違いない。

●R．シュトラウス：楽劇《サロメ》全曲　（写真：前ページ左）
クレメンス・クラウス指揮ウィーン・フィル、ゴルツ（サロメ）パツァーク（ヘロデ）ブラウン（ヨカナーン）1954 年録音
［NAXOS　8.111014（2 枚組 CD）］

クレメンス・クラウス（1893～1954）はウィーン出身の指揮者。リヒャルト・シュトラウスのオペラは「アラベラ」「平和の日」「ダナエの愛」を初演したほか、「カプリッチョ」の台本を執筆、初演するなど深い結びつきがあった。「サロメ」は英デッカ社が録音したモノーラルLP時代の名盤。状態の良いLPから音録りされており、音質は良好。



●チャイコフスキー《白鳥の湖》ハイライト　シュテファン・ゾルテス指揮ウィーン交響楽団　1980 年 10 月録音。
［日本コロムビア　OX-7218-AX（LP）］

1981 年 2 月に日本で発売されたゾルテス（1949～　）のデビュー盤。1956 年からウィーに住み、ウィーン少年合唱団のソリストとして活動した後、1973 年からウィーン国立歌劇場で指揮。1997 年エッセン・アールト歌劇場の音楽総監督に就任。オーパンヴェルト誌の年間賞に 2 度輝くなどドイツ国内で高い評価を得ている。

【板倉重雄氏プロフィール】1965 年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994 年 HMV ジャパン株式会社に入社。1996 年 8 月発売の CD「イダ・ヘンデルの芸術」（コロムビア）のライナーノーツで執筆活動を開始。2009 年 9 月、初の単行本「カラヤンと LP レコード」（アルファベータ）を上梓。

◆訃報：田村宏氏（ピアニスト）が死去

田村宏氏　８７歳（たむら・ひろし＝ピアニスト）５月 18 日、肺炎で死去。告別式は２２日午前１０時、東京都台東区上野公園１４の５寛永寺輪王殿。喪主は妻、裕子さん。

１９４３年に東京音楽学校（現東京芸術大）を卒業し、ウィーンに留学。帰国後は室内楽を中心に活動する一方、母校で後進の指導に当たった。東京芸術大名誉教授。（読売新聞より引用）

コンサートレポート

Fresh Concert CMDJ 2011

～より豊かな音楽の未来をめざして～　報告

報告者：コンサート実行委員長：中島 洋一

第９回 『Fresh Concert CMDJ2011 ～より豊かな音楽の未来をめざして～』が、4 月８日（金）午後 6 時半より、すみだトリフォニー（小）ホールにて開催されました。今年はコンサートが一ヶ月足らずに迫っていた３月 11 日に東日本大震災という未曾有宇の大災害に見舞われ、一時はコンサート開催が危ぶまれましたが、三月末になって計画停電も中止となり、なんとか開催することが出来ました。非常時ではありましたが、予定していた出演者が一人も欠けず、１０組１５人、ピアノ伴奏者を入れると２０人の若い演奏者たちにステージに立ってもらうことが出来ました。

来場者数は、164 人で例年より少なめでしたが、大震災からあまり間がない時期の開催としては、そこそこの入りだったと思いますし、熱心なお客様が多く、出演者の熱演に対して温かい拍手で応えていました。

なにぶんにも、まだステージ慣れしていない若い人達の演奏ということで、過度の緊張からか、小さなミスはありましたが、今年の出演者は技量の面でも粒ぞろいで、全員が音楽をする喜びを噛みしめながら、心を込めて熱演しておりましたので、それがお客様にも伝わったと思います。集まったアンケートにも、「若い人達の演奏だが、予想していた以上に質が高かった」、「若い人達の熱演から勇気をもらった」などの感想が書かれておりました。なお、今回のコンサートでは冒頭の理事長挨拶で、大震災の犠牲者に対して１分間の黙祷が捧げられ、また入り口に被災者のための義援金募金箱が設置されました。なお募金は、終演後、出演者が募金箱を持って呼び掛けてくれたこともあり。3 万 589 円集まりました。集まったお金は日本赤十字社を通して、大震災の被災者に届けました。

以下に、各演奏について寸評を記載しました。私の個人的感想ですので、どうか、気楽にお読みいただきたいと存じます。

なお、演奏写真は、グラビアページに掲載されておりますので、そちらも併せてご覧ください。

① 北風 紘子（ソプラノ）　　ピアノ伴奏：稲葉 千恵

フォーレ　　歌曲集『ある日の詩』　作品 21

1. めぐり逢い、2. いつまでも、3. さようなら

この歌曲集は、過去のフレッシュコンサートにおいて３人の歌手によって取り上げられており、今回が４度目ですが、プログラムの最初に演奏されるのは初めてです。トップバッターということで、重圧があったと思いますが、そのような重圧をはねのけ、バランスの取れた美しい演奏を聴かせてくれました。出逢いの幸福感を感じさせる第１曲、悲しく、そして激しい第２曲、悲しみを

克服し心の平安を得て歌う第３曲、凝縮された愛の物語のそれぞれのシーンを、なかなか見事に歌い分けていたと思います。強いて言えば、第２曲は、もっと激しい緊張感があっても良かったのではないかと思いますが、とにかくコンサートの最初を飾るに相応しい、清々しい演奏でした。ピアノ伴奏とのバランスもよくとれていました。

② 高橋 健介(ピアノ)

バッハ＝ブゾーニ　　「シャコンヌ」

今回のコンサートでは奇しくも、同じ原曲を傾向がまったく異なる編曲で比べて聴くことが出来るという機会を提供してくれました。ブゾーニの編曲は、和声的骨格は原曲のそれを保ちながらも、声部を重複させたり、煌びやかな装飾的音型を加えたりすることで、無伴奏のヴァイオリンソロの曲を、まるでオーケストラのように、分厚く豊かに響くように発展させています。ヴィルトゥオーソ的な技術を要する難度の高い作品ですが、少々音の弾き違いがあったり、難しい装飾的な音型でタッチが乱れたりしたところもありましたが、作品の構造を理解した上で、自分の表現を押し通そうという意欲が感じられ、にメリハリの利いた迫力ある音楽を奏でていたと感じました。さらに丁寧にさらい、細かい部分にも十分な配慮が行き届くようになると、より説得力を増すと感じました。

③ 鎌田 亮子（ソプラノ）　　ピアノ：前田 明子

ベルリオーズ　　歌曲集『夏の夜』　作品９より

“ヴィラネル”、“入り江のほとり（哀歌）”

「寒さが遠のいたら二人で森に鈴蘭を摘みに行こうよ」と、恋人達がうきうきとした気分で歌う**“ヴィラネル”**。恋人の死を、嘆き悲しんで歌う**“入り江のほとり”**。対照的な表情を持つ二曲を魅力的に歌い分けていました。**“入り江のほとり”**は、フォーレも同じ詩に作曲していますが、ベルリオーズの作品は、フォーレに比べると、よりドラマチックに書かれています。演奏者はそのようなベルリオーズの特徴をよく表現出来ていたと思います。我が国では、フォーレやドビュッシーの声楽作品は演奏される機会が多いのですが、ベルリオーズの場合、管弦楽作品に比べ、声楽作品が演奏される機会はそう多くありません。是非、ベルリオーズの他の声楽作品に、挑戦していただきたいと思います。

④ 申 恩珠（ピアノ）

ショパン　　マズルカ　作品 59（全３曲）　1.イ短調 、2.変イ長調、3.嬰ヘ短調

宗教音楽も勉強しているという経歴もあってか、この人は魂のこもった演奏をする人です。ゆっくり目の楽想では、三拍目をかなり長く保ち、独特の表現をします。しかし、第一曲目の中間部で次の音を忘れてしまったのか、一瞬止まってしまい、そのことで精神的に動揺してしまったのか、二曲目、三曲目でも同じようなミスを重ねてしまいました。そういうことがなければ、聴く人の心の奥底に響いて来るような音楽を奏でることが出来る

人だけに、もったいなかったと思います。何回も反復して演奏することで、音楽はその人の記憶の世界に定住します。そのように、音を憶えきってから、演奏すると、きっと、人の心を捉えて離さない、音楽の魂が伝わる演奏が出来ると思います。

⑤ 今井 梨紗子(ソプラノ)　　ピアノ：渡邉　美文

諸井三郎　　“少年”

ヘンデル　　オペラ《エジプトのジューリオ・チェーザレ》より

“私に憐れみを感じてくださらないなら”

最初に諸井三郎の「**少年**」を歌いましたが、この作品の清潔な叙情性をよく引き出していたと思います。日本語も、かなりよく聴き取れました。

ヘンデルのアリアは、バロックオペラ特有の装飾的音型が多く、技術を必要としますが、なかなか情感のこもった美しい歌い方をしていたと思います。しかし、時折、音程がやや不安定になる傾向がみられました。こういう問題は、さらなる鍛錬の積み重ねと、年を重ねることにより発声が安定して行くことで、徐々に解消して行くのではないかと思います。

今回は、バロックのオペラアリアを歌いましたが、古典派、ロマン派のオペラ作品にも挑戦し、レパートリーを広げて行って欲しいと思います。

⑥ 加藤 千理(Fl.)／椎野 未花(Ob.)／誉田 未季（Cl.）／小林 香緒理(Fag.)

齋藤 嵩之(Horn)／草間 葉月(Pf)　　《六重奏》

プーランク　　「六重奏曲」（全３楽章）

このメンバーが学んだ音大では、大震災の影響で、卒業演奏会はおろか、卒業式、謝恩会などの行事がすべて中止となったそうです。そういうこともあってか、これを卒業演奏として、新しい世界に旅立とうという若々しい意欲が溢れた音楽を奏でてくました。「**六重奏曲**」は急から緩へ、緩から急へと、テンポも移り気に変わり、主旋律も楽器間でめまぐるしく受け渡される饒舌で機知に富んだ作品です。部分的には若さから来る荒さも見られましたが、６人の息はよく合っており、アンサンブルに大きな破綻はなく、難しい個所も気合いで乗り切っていました。第二楽章のオーボエではじまる楽想ではタップリ歌い、最後のフィナーレでは、元気溌剌とした音楽を聴かせてくれました。また、同じメンバーでこの曲を再演することは、状況からしてなかなか難しいかもしれませんが、出来れば、また同じメンバーでアンサンブルに挑戦していただきたいと思います。

⑦ 坂本 久美（ソプラノ）　　ピアノ：森田 真帆

フォーレ　“アルペジオ”作品 76-2 、　“ばら”作品 51-4

ドビュッシー　　“現れ”

フォーレの円熟期の歌曲２曲と、ドビュッシーの初期の作品が演奏されました。そこはかとない詩情を漂わせた「**アルペジオ**」の演奏、ピアノとの対話が可愛らしい「**ばら**」は、曲想を良く生かした好演だったと感じました。最後に演奏した[**現れ**]は、17 才年長のフォ

ーレの前 2 曲より、かなり早い年代に書かれた初期の作品ですが、色彩的で細やかなピアノの伴奏、めまぐるしい転調をともなう和声法などにドビュッシーの才能の片鱗が伺えます。しかし、歌のパートは幅広い音域で大きな跳躍があらわれ、声楽的にはなかなか難しい曲です。色彩感はよく出せていたと思いますが、pp で書かれたハ長調の中間部では、もっと声を弱め、内面に沈潜するような歌い方をして欲しいと感じました。しかし、美しい声の質と豊かな表現力を備えており、将来が楽しみな人です。なお、森田真帆さんの繊細で詩情豊かな伴奏は、歌をよく引き立てていました。

⑧ 北村 真紀子（ピアノ）

バッハ＝ブラームス　左手のためのシャコンヌ

こちらは、ブゾーニと同じバッハの原曲を、ブラームスが編曲したものですが、原曲の構造を出来るだけ損なわないようにシンプルに編曲されており、その姿勢はブゾーニとは対照的です。ブゾーニ版に比べて、素朴で、やや華やかさに欠けるブラームス版の演奏は、楽譜を表面的になぞって行くだけだと、単調になってしまうのですが、重要な声部をはっきり浮きたたせ、また、時々の楽想にあった強弱の変化を演出していました。そして、セクションの変わり目などで、たっぷりと間をとるなど、この作品に対する演奏者の思い入れが聴き手に強く伝わる演奏をしたと思います。そのような聴衆の感動は、集められたアンケートからも、うかがい知ることが出来ました。今は、病気で右手が使えないらしいのですが、そんなことに臆することなく自信を持って演奏活動を続けていただきたいと思います。

⑨ 大武 彩子（ソプラノ）　　ピアノ：斎藤 亜都沙

オッフェンバック　歌劇《ホフマン物語》より　“森の小鳥はあこがれを歌う”

“森の小鳥はあこがれを歌う”は**《ホフマン物語》**の**【オランピア】**の部で、ゼンマイ仕掛けの機械人形：オランピアが歌うアリアです。機械人形なのでゼンマイが切れると音程がだんだん下がり動かなくなってしまいます。伴奏者がゼンマイの擬音を出す機器を奏でると、動き再び歌い出します。伴奏者の協力もあり、このシーンでは滑稽でチャーミングな感じがなかなか良く出せていました。この曲は高度なコロラトゥーラの技術を必要とする難曲ですが、演奏者は昨年の国立音楽大学の大学院のオペラ《コシファントゥッテ》では、低い音が書かれていることで有名なフィオルデリージ役を歌い、この日のアリアでは、三点ト の音を歌っていました。柔らかいリリコの声から、華麗なコロラトゥーラまで歌いこなす声と技術を合わせ持っており、まだ時折少々荒削りのところが見られますが、将来が大いに楽しみな人です。なかなかの勉強家なので、オペラから歌曲まで幅広いレパートリーを歌いこなす、スケールの大きな声楽家になって欲しいと願っています。

⑩ 鄭 胤先（ピアノ）

リスト　「リゴレット　演奏会用パラフレーズ（ヴェルディ）」

この演奏は、この日のコンサートを締め括るに相応しい演奏でした。部分的には少々の

乱れはありましたが、そういうことを払拭して余りある、華麗で堂々とした音楽を紡ぐことが出来たと思います。演奏者は大震災の後、しばらく母国の韓国に帰っていたため、なかなか連絡がつかず心配しましたが、演奏を聴く限りそのような心配は杞憂だったようです。難しい技術を要する曲ですが、ピアノの響には壮大さの中にも透明感があり、切れが良くエレガントな演奏だったと思います。おそらくもうしばらく日本で勉強した後、母国を中心に演奏活動をするのでしょうが、日本も含め国際舞台で活躍して欲しいと思います。

最後に５人の伴奏者がいずれも５人のゾプラノの歌をよく引き立たせる伴奏をしてくれたことに触れておきたいと思います。

ところで、前述したようにコンサート終演後、出演者が義援金の募金箱を持ってロビーに立ってくれましたが、今年は終演後の打ち上げは自粛しました。その代わり、4 月 17 日（日）18:00 より、本会事務所にて懇親会が開催されましたが、出演者側からは北風（ソプラノ）さん、高橋君（ピアノ）、齋藤君（ホルン）、坂本さん（ソプラノ）、北村さん（ピアノ）５人が、そして音舞会側からは戸引理事長、助川代表理事、北條公演局長、栗栖事務局次長、それに私の５人で合計１０人が出席し、軽い食事をしながら、和やかなうちにも、熱い音楽談義が交わされ盛り上がりました。

その時の写真を紹介します。（なお、北村さんは早めに帰宅したため写っておりません。）

左から栗栖さん、北条氏、齋藤崇之君、高橋健介君、助川氏、坂本久美さん、戸引さん、北風紘子さん
（撮影：中島　洋一）

（なかじま・よういち　本誌編集長）

コンサートレポート

日本音楽舞踊会議　作曲部会公演　作曲部会作品展

音楽評論　西　耕一

演奏会プログラムについて

筆者が本公演だけでなく、昨今のプログラム冊子やCDブックレットについて気になっていることがある。最初はここから語りたい。本公演のプログラム冊子は16ページもあり、紙質も良い、デザインもスタイリッシュであった。冊子を受け取った時、立派な演奏会だと予感する。これが白色コピー用紙のペラ紙であった場合は申し訳ないが期待は薄れる。チラシやプログラム冊子・演奏会の雰囲気作りも鑑賞に響くのである。見た目だけではなく中身も重要だ。聴き手は、演奏前にプログラム冊子を読んで曲名や作曲者ノートで事前情報を得る。ロマンティックな解説、情報だけの理系解説、散文詩のようで難解な解説も場合によっては期待となる。過度な期待は首を締めることもあるのが・・・。

それより重要なのは、必要な作品・演奏家の情報である。誰の曲か、誰が演奏するかは当然ながら、初演か再演か、いつ完成したか、場合によっては作曲に費やした時間・期間、再演ならば初演データがあっても良い。最低限載せるべきは作曲年と初演 or 再演であろう。この最低限情報さえ抜けている演奏会・CDに出会うことは少なくないのである。今回のプログラム冊子も一部そのような例が散見された。意地悪を承知で細かく提言すれば、第何回目の作曲部会作品展なのか、歴史と伝統ある団体だけにその記載がないのは勿体無い。くどいようだが作曲年と初演 or 再演の記載、

音楽現代

2011年6月号　定価840円

このたびの東日本大震災の犠牲になられた方々に深く哀悼の意を表しますとともに、被災された皆様に心からのお見舞いを申し上げます。一日も早い復興をお祈り申し上げます。

♪特集　鎮魂、そして復活、希望、未来
　～音楽・音楽家に今何が可能か
♪短期連載　東日本大震災と東北音楽界～復活に向けて
　『つながれ心、つながれ力』〈工藤一郎〉
♪特別レポート　ニューヨークの小澤征爾＆サイトウ・キネン・オーケストラ
♪「音楽現代」創刊40周年記念アーカイブ1
　座談会「洋楽百年のひずみ」
　（武満徹＋遠山一行＋福田達夫）
♪カラーロ絵
・東北応援チャリティー・コンサート
　～仙台フィルとともに～
・プラシド・ドミンゴ・コンサート・イン・ジャパン2011
・東京・春・音楽祭—東京オペラの森2011～東日本大震災被災者支援チャリティー・コンサート～ズービン・メータ指揮／NHK交響楽団特別演奏会：ベートーヴェン「第九」
・福田祥子＆シュテファン・モラー
♪インタビュー
　湯浅勇治＋三ツ石潤司 他　高橋英郎　三浦章宏
　ウォニー・ソン
♪新連載　堀内修の「月例報告」

〒111-0054 東京都台東区鳥越2-11-11
TOMYビル 3F

以後、関係者には留意して頂きたい。

当日の演奏会について

当日は生憎の雨天。暗い気持ちでホールへ向かった者も多かったはずであるが、第1曲目に置かれたアルトサクソフォンとピアノのための《憂鬱な序奏とロンドスケルツァンド》（2010）初演はその暗い気持ちを晴れやかにしてくれた。作曲は本公演実行委員・桑原洋明。演奏はAlto Sax鹿蔵雄介、Pfすずきみゆき。近代フランス作曲家を思わせるロマンティックで悩ましげなサックスの音色が聴き手の憂鬱を掴み同調させ、ロンドスケルツァンドの軽妙洒脱なピアノとサックスの掛け合いリズムとドライヴの心地良さで昇華する。この曲ならどの演奏会で再演しても喜ばれるだろう。鹿蔵とすずきの息の合ったデュオの豊かな音楽性も特筆される。

2曲目は金藤豊《トッカータ第二番（水墨画の技法によるイマージュ)》の初演。演奏はPf並木桂子。書き直しや修正を行わない水墨画の技法を作曲に適用したという。確かに思いつくまま一筆書きで書く音の連なりが現れては消え、現れては消えという具合。鐘の音、点描、日本音階など様々。音の結晶を紡ぐ並木の解釈も見事。

3曲目は浅香満《ピアノのための３つの前奏曲》(1997)《ピアノのためのバラード》(2003)の再演。演奏はPf岡崎ゆみ。いずれもピアノ音楽の愉しみが凝縮されたような曲であった。前奏曲の3曲目は特にその要素が色濃いだけでなく、岡崎の自家薬籠中とした演奏も味方に、例えばショパン、リスト、ラフマニノフらのピアニズムとロマンを纏いつつ作品としての作家性を失っていない逸品といえよう。その凝縮された結晶の美を体験した後に演奏されたバラードが少し霞んでしまったくらいのインパクトであった。バラードもロマンティックでムーディーな間奏やリズムの巧みさなど興味をひくものがあった。

4曲目、島筒英夫《高橋一仁の童謡詩によるうた》(2011）は4月に初演されたばかりの再演。演奏は初演と同じSop浦富美、Pf島筒英夫。島筒自身が「主要三和音によるおとなしいもの」と語る曲集だが、透明で素直なピアノ演奏に心洗われた。一聴するとシンプルに思われるが、曲集としての構成も考えられている。序奏として「はるのちょうちょ」がハキハキと日本語を聴かせ「そろってようちえん」の楽しみ、「こいのぼり」の浮遊感、「かねたたき」では虫の鳴く声を模したピアノから美しく心にしみる子守唄になる。「いいのにな」を間奏として「あんよのぼうし」の小品を置いて「おはなのちきゅう」で合唱曲やマーチにも出来そうな長調で快活にまとめていた。浦の歌唱は、日本語を的確に響かせて聴きとりやすく、島筒と詩人の意図を明快に音楽へ乗せて伝えた。

休憩を経て５曲目、ロクリアン正岡《クラリネット幻想曲「無伴奏人体ソナタ」》(2010)初演。演奏はCl内山厚志、天然脳独創思考パフォーマンスをロクリアン正岡。正岡が、音楽に内包された狂気を曝け出すことが重要であるという意味のことを舞台ではなく薄暗い

客席で直立朗読してから演奏は開始された。曲は満遍く楽器の音域を使用して特性もよく理解していた。技巧の見せ所もある。そして無伴奏ソロとして音のみで雄弁に語る要素もある。内山の演奏も入念な譜読みと音楽の内奥を捉えたものであった。しかし正岡の「天然脳独創思考パフォーマンス」が事前に紙へ書いた意見朗読だけであったのには首を傾げざるを得ない。朗読と演奏がまったく切り離され、協奏することなく、朗読に音楽的な要素は殆ど感じられない。さらに演奏後、拍手を遮るように再び朗読が始まるのはダメ押しで音楽感動の余韻を打ち消してしまう。「天然脳独創思考パフォーマンス」と名乗るのであれば、その名に相応しい超越パフォーマンスであって欲しいし、作曲家・音楽家ゆえのものであるべき。感受性豊かで音楽家として独自な個性を持つ正岡なら出来るはず。パフォーマンスを行うならば「天然脳独創思考パフォーマンス」とは何かをもう一度突き詰めてから、誰も真似できぬ「独創」をと筆者は期待する。

6曲目は津田裕子《天地の眼（あめつちのめ)》を作曲者がPfソロで初演。「天地眼」とは、天と地を同時に見つめる知恵の光明を宿す瞳のこと。音楽は、即興的に変容されて自然の有り様を描く。聴きながらゆったりと時間を味わう気分はキース・ジャレットなどのジャズを思わせる部分もあった。

７曲目、高橋通《２つの小舞曲》(2011）の初演。編成はFl河合沙樹、Pf栗栖麻衣子、ダルブッカ児玉和人であるが、音楽より舞踊芸術とのコラボレーションを狙っていた。1〈青い月の光の中で〉2〈藤の精の踊り〉からなるが、どちらも音階やリズム、ダルブッカ等の中近東の独特さが活きたオスティナート音楽の中、前者でJuliaがベリーダンスを艶めかしく、後者では地歌舞の名取も持つsaamiyaが和の要素も取り入れたベリーダンスを披露し、本公演のなかでも特に華やかな宴となった。カーテンコールで現れた作曲者はターバンを巻いて中近東の伝統衣装。ここで同作品が昨今の中東情勢をも意識した世界平和を祈念したものであったと納得した次第。

最後は藤村記一郎の歌曲。《あなたたちが》(1994）作詞・エディマ、《赤い風》(2009）作詞・佐々木淑子、《母と子の四季のうた》(1993）作詞・門倉さとし、より〈夕焼け〉〈花びら〉。いずれも岡村麻美と藤村記一郎の歌でPf夏目順子とVn安藤衣里。《あなたたちが》のみ岡村と夏目の演奏。岡村と藤村が同時に歌うと岡村の声量と美しい声質が勝ちすぎてしまう部分もあったが、岡村の声を聴くだけで心が躍る。どの曲も高度な作曲のテクニックよりも歌う愉しみを教えてくれるよう。ミュージカルの一場面を思う素朴な歌心に溢れており、演技や舞台演出とともに鑑賞したいものである。

最後に、今回の演奏会を聴いて思ったのは日本音楽舞踊会議の作曲部会がそれぞれに自己の音楽へ正直に立ち向かっているということ。一晩の演奏会を聴いて煮え切らない思いというものはなく、それどころか清々しい心で演奏会場を後に出来たことは特筆しておきたい。

（にし・こういち　本会　賛助会員）

《明日の歌を》— 楽友邂逅点ガクユウカイコウテン —

橘川 琢

第三回 上野雄次 花と音、生と時間の求道 (2)

情勢厳しい「今」のただ中で日々模索する音楽人・芸術家。自ら信じる《明日の歌》を奏でながら発し続ける「現場」の声・その後ろ姿は、ともに旅する友のエールに似ている。
三回目は、「花道家」として、「花いけ所作」というスタイルを通して「生」を模索している上野雄次氏に、対談形式でお話を伺いたいと思います。

■上野雄次（花道家）

1988 年、勅使河原宏の前衛的な「いけばな」作品に出会い、華道を学び始める。国内展覧会での作品発表の他、バリ島、火災跡地など野外での創作活動、イベント美術なども手がける。

2005 年、「はないけ」のライブ・パフォーマンスをギャラリーマキで開始。地脈を読み取りモノと花材を選び抜き、いけることの独自な生きる世界を立ち上げ続けている。

創造と破壊を繰り返すその予測不可能な展開は、各分野から熱烈な支持を得ている。詩人、写真家、ミュージシャン、工芸家等とのコラボレーションも多数行っている。http://ugueno.com/

■橘川 琢（作曲家・日本音楽舞踊会議理事）

作曲を三木稔、助川敏弥の各氏ほかに師事。文部科学省音楽療法専門士。文化庁「本物の舞台芸術体験事業」に自作を含む《羽衣》(Aura-J)が採択される。『新感覚抒情派（「音楽現代」誌）』と評される抒情豊かな旋律と日本旋法から派生した色彩感ある和声・音響をもとにした現代クラシック音楽、現代邦楽作品を作曲。現在、諸芸術との共作を通じ、美の可能性と音楽の界面の多様性、さらに音楽の存在価を追究している。

『――（前略）花をいけるということは、その自然な野花が持っている世界観を、どんな環境で、どんなバランスで感動的な形に見せ、活ければ良いのかを考えるということ。

一つの命が最終的には大きな宇宙観のところまで行くようなイメージまで届くようなものに変わるためにはどうしたらいいのか。もっとこう、見る人の心のひだに触れてゆくような鮮やかなアプローチの仕方をするにはどうしたら良いか。野にあればそのままでも美しいものを、こうして今この空間でいけるという意味は何かを常に考えています。花をい

けるということは実際大変劇的なアプローチなのだと思います。(上野雄次)』(前号より)
■花が在ること、命を手にすること

──「野にあればそのままでも美しいものを、こうして今この空間でいけるという意味」そして「劇的なアプローチ」というお話ですが、劇的とは・・・

「ええ。野で咲いていればそこで生命、自然が完結しているのに、花を切って、命の無い状態にして室内などいける場所へ持って来て器と合わされます。これは自然にまず無い状況です。そして命という点から言えば、花いけは花が死んでから始まります。『生花』というまさに命の存在を手にしていると思えば、これ以上劇的なことは無いですよね・・・。」

──なるほど・・・例えば、茎を水にさすということは、当たり前かもしれませんが花の鮮度を保ち長く鑑賞するために必要と思いますが、これはこの瞬間の空間を綺麗に創るだけでなく花が少しでも長く美しく見えるよう気を配るという事、命の輝きに対する花いけの繊細さのようにも思います。

「そうですね。これも、状況によってやはりアプローチの仕方が変わってきますね。日常的な空間に楚々とした花をやさしく活けるときに、水なしで在るということはないです。非常に柔らかくてゆったりした空間や状況に落とすということは、花の輝きも、ゆるやかで少しでも長くつなぐようなバランスを意識して花を活けなければいけない。そのやわらかな、やさしいバイブレーション（波長）に合わせる。」

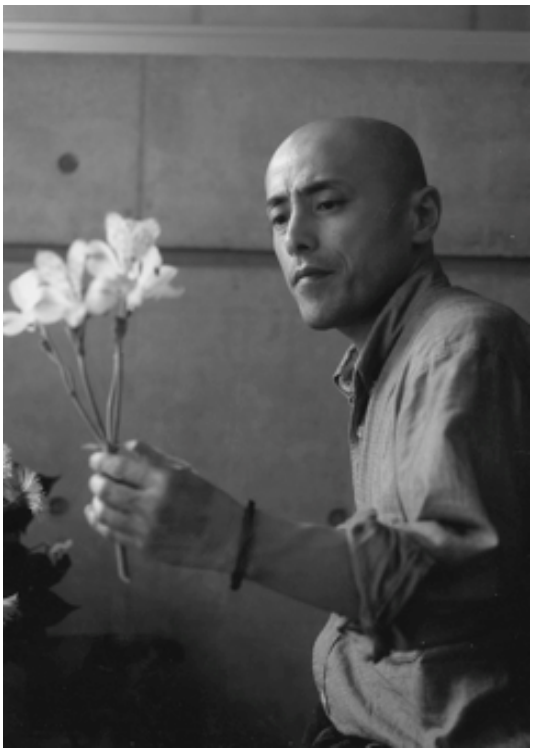
──なるほど。

「水が無ければ、あっというまに枯れてしまい、花のある時間の流れが急激になってしまう。もちろん、それを最終的に、見てもらいたい人に『水の下がった悲しげな花の状況を見せたい』という意図があるのであれば、そういうことをすることもあると思うのです。」

■上野花道・「動」の花活け　・・・「命」と「時間」の流転

──上野さんが花いけ教室で見せて下さる「静」の花いけの時とは違い、ライブで行う「動」の花いけで時には、激しく踏みつける、なぐりかかる、縛る、焼く、つぶす、色を塗る、手でかき集めまとめあげるという、「静」の花いけの際には想像もつかないような、緊張感のある行為もありますね。花に対して行われている意味を考えますと、単に暴力的破壊などを見せる事を目的としているわけではなく、私には多くの暗喩があるように感じられます。大きな「圧」によって何かが変わってゆく現象を通じて・・・。

「その時その時の意味は色々ありますけど、一つ大切な事として、僕自身の表現・・・急速に死に向かってゆくようなこと・・・その過程を起こす事、示す事が必要なんです。必要な表現の流れの中で。実際生きているということは、死に向かっていること。そのことについて、こう、花を通して、生きるということ、生きているということを自分に対して問いかけていることでもあるんです。



写真：HIROSHI MITANI

---命と形が極度に変容してゆく姿を通して、「生」を・・・。

「この今みたいな時代の中で、こう、命というのは一番見つめなければいけない対象です。花と命のあるその景色を、自分自身が急激に姿を変えさせて起こしてしまった現象に、危機的な状況に対し、まず自分自身目の当たりにする、しなければならないということがいちばん大きいんです。そして見ている人にもそれを見てもらいたい。いま同時に、一緒に、花を、命を見ましょうと。・・・まあ、（危機的な状況を）自分でやっといて何言ってんだって話でもあるんですけど。(笑)」

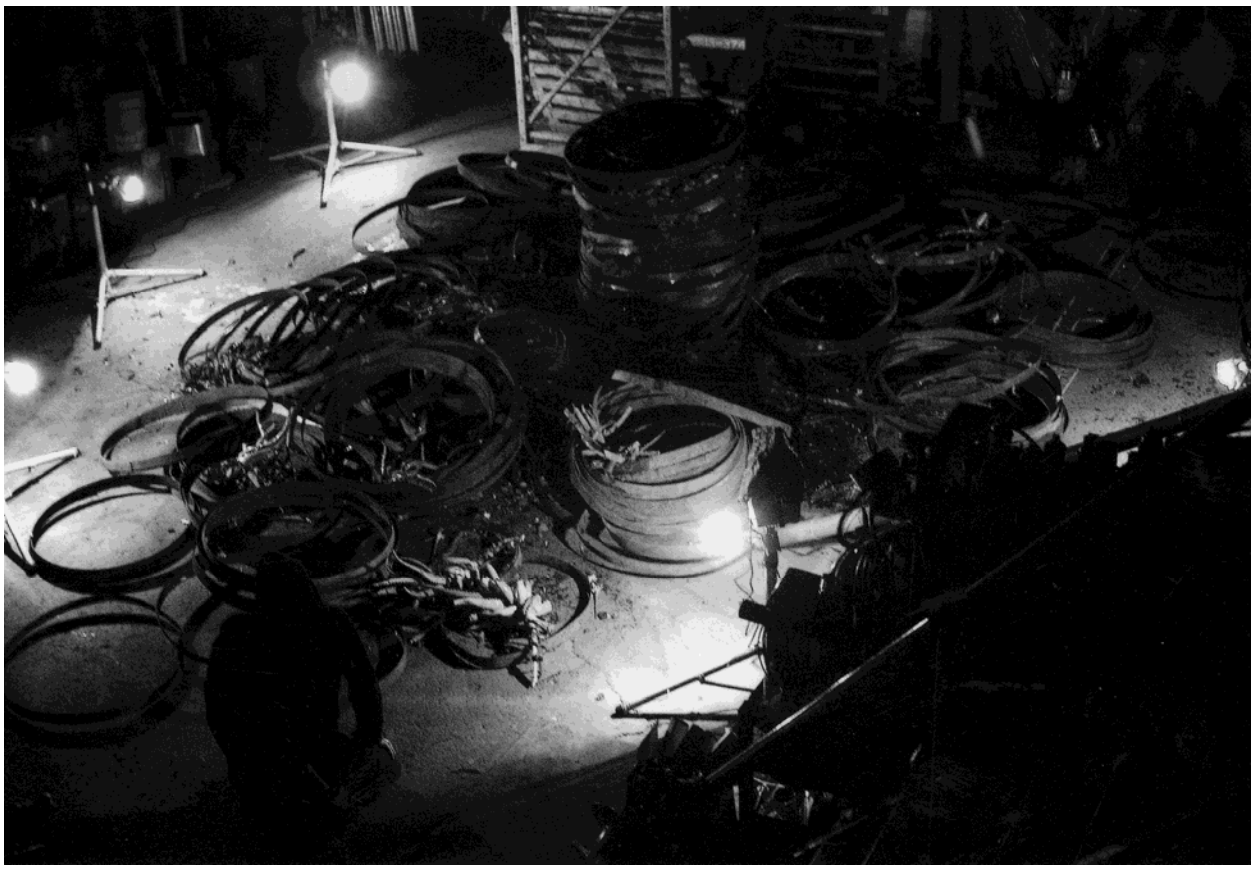
■　破壊と再構成・・・フラットな目線の、その先

──ところで、こういった急な変化を起こす事前準備やシナリオはあるのでしょうか。ライブパフォーマンスを何回か拝見しお話を伺っていますと、衝動・即興表現もあるようで・・・。

「破壊するという行為や表現に至ることについては、僕自身が徹底してコントロールしてその表現世界まで持って行くというよりは、それまでに事前準備したことで、自分が思っている強いイマジネーションが、見ている人に生まれてくるような強いアプローチが出来ていれば、さらに自分自身もその景色にいて満足できるようなところまでアプローチできていれば、やらずに済むこともあるんです。

やはりライブの中でエスカレートしてゆく時は、それまでの流れで自分の中でもまだ一番の瀬戸際に立たされている感じがしなくって、このままじゃ終われないなという思いが出たとき。自分の予想すら超える危機的な状況を自ら起こそうと、一回目の前の全部を壊してみてまたそこからどうするか、再生するかどうかといった状況を自分に課してみるのです。」

──再創造の地平を創るための破壊、ですか。



花と音のライブパフォーマンス「臨界 rinkai」
上野雄次（はないけ所作）
×岡本紀彦（サックス奏者）
日時：2008 年 5 月 18 日
場所：ＯＭＡＴＡ戸田支店工場内
撮影：わだ　つばさ

そうですね。破壊に至るアプローチをする表現者は他にもいますが､ただ壊して喜ぶのではなく、本当の意味での破壊を本質的なアプローチとしてとらえている人は、生命の危機的表現の他にも、破壊によって何もかもが失われたときにこう、全てがフラットになるような平らかになるようなバランス、その景色を感じたり見たかったりするんじゃないでしょうか。

何もかもすべてを失ったときに､人は自分を『一つの命の存在』として存在し得るのかもしれない。例えば、これまで何かを共有してきた人同士だとしたら、いろんなわだかまりや摩擦みたいな物が必ず起きる。色んな物を身につけていたり抱え込んでしまっているが故に、人同士、フラットな関係になり得ない。そういう時、一度お互い全く何もかも失った状況の中に立ったら、非常にフラットな関係や状況から始められる。そういうところに生まれる『ゼロを見たい』という思いなんじゃないかなと思います。」

■「今」のただ中にあって　・・・表現者として、芸術家としての「生」とは

──そのフラットな姿を前にして、表現者として芸術家はいろいろな立場や思想で向かい合いますよね。例えば音楽もそうですが、破壊し平面にしたところで表現を断ち切ってその後は鑑賞者の想像力に投げかける人もいます。今起きた現実をそのまま描写する人や、その現実を見て受けた自分の心象風景を描く人もいるでしょう。さらにこの現実の後に、これを前にしたあなたの心が欲しいと思っているものはこれではないでしょうか、いま一緒に見たい景色はこれではないですか？とそっと差し出すような人もいて。これは表現者の立ち位置や目線の向け方や美意識の問題ですので、もちろん何が正解・不正解の話ではないのですが・・・。

「ええ。」

──そんな中で、上野さんがフラットにしたいがために何かを「破壊する」にとどまらず、そこから先の事を必ず意識する強い責任の気持ちを持っていらっしゃるということ。命の置かれた今を凝視して、未来を想う表現姿勢・・・。作曲家として、特に構成哲学の上で共感しております。

ライブパフォーマンス「燐舞 rinbu」
上野雄次（はないけ所作）×生野毅（俳句朗読）
日時：2008 年 2 月 22 日
場所：GALLERY MAKI
撮影：わだ　つばさ

「まあ、生きている限り、壊すだけでなく戻さないといけないわけで。いま橘川さんがおっしゃったように、破壊しっぱなしでも『芸術表現』としては何ら間違いではないと思うんです。一回ゼロに落とされた後からもう一回復調・復帰するのはその人の意思や表現でしょうし・・・。だから僕自身がライブのとき、破壊しっぱなしで終わることもありますよ。でも、僕自身その後も生き続けなければいけない訳で、破壊しっぱなしの落とし前をどこかでつけなければならない。作品でつけなければ、それはこの後作品のさらに先、現実に生きている場所で生き方で証明してゆく。さらに僕の場合は、その後、同じ花いけという行為で証明してゆくということになると思います。」

──芸術表現や創作で描いた「生」を、その場の「芸術」だけにとどめず、自分の命の一連続性として大切に受け止め、これからの自分の現実、そして未来の表現へ引き継ぐということですね。

次回、コラボレーションの中で見えること、互いを生かし合う「花」と「器」の関係、「花」と「音楽」の在る風景等について伺います。（本稿は 2011 年３月１日に行われました対談を、編集・再構成したものです。前号の予告と一部内容に変更がございました事をお詫び致します。）（次回、第三回終）

現代音楽見聞記（3）（4）2011 年 3、4 月

音楽評論　　西　耕一

3 月 11 日、我が国は未曾有の災害を経験した。巨大な地震そのものだけでなく、しばらく後の津波や火災で被害が拡大したのは 1923 年の関東大震災と同じであった。しかし我が国は、そのような予想されたはずの被害にも対応出来なかっただけでなく、1923 年には存在しなかった原子力発電による二次災害まで巻き起こしてしまった。目に見えない恐怖は、この原稿を書いている 5 月でも続いている。年齢にかかわらず 5 年、10 年後に自分が生きているか、健康で居られるか判らないのである。そのような状況下で現代音楽界はどうあるべきだろうか。

3 月は 1 日、毎年京都で行われているフランス音楽アカデミーの講師の作曲家とアジアの作曲家をアンサンブル・ヴィーヴォがけやきホールで無料公演。アラン・ゴーサン、阿部 俊祐、金子仁美、ハン・ジョンフン、パク・チャンウォンらのソロからトリオまで、フランス、日本、韓国の若手から指導者の創作を聴けた。5 日は一柳慧プロデュース アンサンブル・ニュー・トラディション「千年の響き」として箜篌など正倉院時代を中心に日本・アジア楽器の混合編成の新作・旧作を聴く。現代邦楽普及へ貢献した一柳、石井眞木らの取り組み、新作初演の川島素晴、宮内康乃らの音遊びやインスタレーションへの志向など時代が一周りしたように感じた。神奈川県立劇場小ホールが満員であったのも驚き。6 日は 12 人の声楽アンサンブル・ヴォクスマーナ定期。川島素晴の 12 人のおかしな日本人委嘱初演が白眉。同団は田中信昭門下の指揮者西川竜太が率いる。半世紀以上活動する東混を見習いつつ、ピアノ無しの 12 声で若手を中心に新作委嘱と重要な旧作の再演・日本初演などを行う。川島新作は 12 人へ、井戸端会議、老人、政治家の演説等、キャラクターを設定して、各自のセリフを細胞として増殖堆積 1～12 声を絶妙に変幻して合唱となる。演技も交えて楽しく巧みな構成は爆笑も誘う。現代合唱曲として先達を踏まえながら川島の個性も発揮しており、ヴォクスマーナだからこその内容にしたのも見事な傑作。

8 日は mmm...の第 2 回演奏会。P 大須賀かおり、fl 間部令子、vn 三瀬俊吾、作曲ダリル・ゼミソンによるグループだが、作曲家が「友達の輪」で紹介して選曲、つまり演奏家や主催者でなく作曲家間の信頼と友情で偶然に演目が決まるのである。選曲に主催者の審美眼が介在しないのだ。長く継続して聴きたい。当夜は現代的書法とアジア的音感を高い集中で持続させたキー・ヨンチョンの vn ソロが白眉。大震災を挟み、13 日は湯浅譲二作品演奏会 II がほぼ昨年と同じ室内楽曲を集め開催。同日、マリンバの塚越慎子も余震で軋む浜離宮朝日ホールで横山克、狭間美帆曲を委嘱初演。この後は中止・延期が続く。18 日、東混定期が篠田昌伸委嘱初演、野平一郎、西村朗等。余震続く中ゆえ集客に難はあったが西村曲の迫真凄まじ。19 日は京都アルティへ。高橋裕のオペラ・双子の星が委嘱初演。ドラゴンボールやうる星やつらで知られる小山高生が脚本。17 楽器と声楽・俳優・狂言師によ

る。関西弁・標準語、俳優的・声楽的語りなど要素が多すぎて2時間半の大作となったが、セリフ部分に時間を取られ音楽劇的になってしまったのは残念。25日は東京音大生によるロリエ弦楽四重奏団が20～30代の作曲家を特集。川上統の藪蟲斯、木山光のSQ2番、山本哲也のギミックバッハ、三留丈樹のタンゲリア等。中でも現音作曲新人賞2010受賞者の山本はまだ国立音大3年。現代音楽を旺盛で貪欲に消化する発展途上の勢いが音に溢れる。このような斬新な選曲は学生でないと出来ないのだろうか？　4月は3日、クラリネット作品コンクール本選会から。審査員に作曲・池辺晋一郎、北爪道夫、野平一郎、Cl奏者・磯部周平、中村克己、三界秀実、横川晴児。小栗克裕も朴守賢も楽器の個性を良く理解したソロだが小栗は木管の鬱屈へ、朴はヒステリックな高音へ着目。ピアノとの二重奏は、荒川洋が近代フランス。南聡は自作引用か再作曲かと思うがそれも個性か。白藤淳一は書法の洗練より情念の音楽化を狙った。南の11の顔 と白藤の痴人の愛が1位。公開審査にて作曲家と演奏家審査員で演奏したい曲とそうでなくとも意義のある曲について意見が割れたのは留意すべき。7 日、フランスのブローニュ音楽院の教育用作品を募集したコンクールで日本人の木山光、岩瀬くみが室内楽曲で2人1位。9日、東京・春・音楽祭 で長岡京室内アンサンブルが林光の３つの映画音楽を委嘱初演。武満映画音楽にある不良っぽさと林の家族的叙情の対比が感じ取れた。映画音楽を多く作った作曲家はこのような演奏会用作品を仕上げるべきと思う。10日は入川舜ピアノリサイタル旧奏楽堂。大澤壽人、乾春男のソロ。菖蒲弦楽トリオを加え、諸井三郎のピアノ四重奏曲を蘇演。15日、東フィル第800回定期は震災で中止になった3月の100周年記念公演以来。三善晃のオケコン、武満徹のオリオンとプレアデス、シベ２という内容。尾高忠明のシベ２は日本国民の悲壮たる心を代弁する真に迫った名演。１７日は本名徹次が音楽監督の任期を終えて初のオーケストラ・ニッポニカ定期。ニッポニカと言いつつ邦人曲は唯是震一の箏と管弦楽のカプリチオのみ。日本初演のドーソンはその意義より、本当に芥川也寸志メモリアル・ニッポニカのやるべき仕事であろうかと敢えて言う。19日、日本歌曲と音の魔術師たち第43回 別宮貞雄IIは関定子が顔面を真っ黒に塗って歌うオペラ・三人の女達の物語が怪演！万葉集による3つの歌をｐ伴奏で歌った綱川立彦の歌唱も名演。22日、田中信昭エクソンモービル音楽賞受賞記念東混55周年記念第一生命ホール10周年記念は柴田南雄の萬歳流し久々の上演を含め、東混が日本の近代合唱へ果たした役割を強く再認識させられた。28日、Point de Vue vol.Vは川島素晴2台ピアノのためのエチュード、名倉明子チェロと二十五絃箏の白緑の影の初演、三善晃の童声合唱とオーケストラのための「響紋」(オリジナル2台ピアノ用リダクション版/初演）等。三善曲についてこの記載では誰が編曲か何がオリジナルか判らない。編曲は管弦楽の音色もダイナミクスも表情も中途半端にピアノへ移し変えたもの。29日は、Tokyo Cantat「やまとうたの血脈II」で平井康三郎、信時潔、西村朗、木下牧子、新実徳英、三宅榛名等の合唱曲を聴いた。

（にし・こういち　本会　賛助会員）

矢澤見どりさんを偲ぶ会が催される

作曲　高橋 雅光

本会声楽部会会員でシャンソン歌手の矢澤見どりさんが、本年２月３日に国立国際医療センターにて脳梗塞で８４年の生涯を閉じられたが、見どりさんの遺志で葬儀は行われなかったので、３月２７日豊島区立生活産業プラザで「矢澤見どりさんを偲ぶ会」が催されました。

主宰されたのは、公益社団法人「日本認知症グループホーム協会」東京支部長であり、社会福祉法人「泉湧く家」理事長宮長定男氏です。

宮長氏は文京区千石にある「宮長スタジオ」の経営者であり、私も大変お世話になった宮長妙子氏のご子息で、見どりさんも先に亡くなられた矢澤保（寛）氏と共に、古くからのご友人です。また、見どりさんが「泉湧く家」に入所されたことや、その後医療センターで宮長氏に最期を看取られたことは不思議なご縁であったと思います。

「偲ぶ会」が催された会場には、生前見どりさんが気に入っていた、ご自分の歌っている写真が飾られ、「泉湧く家」の職員の方々や、親戚の方、知人の方々がお集まりになられ、録音された見どりさんの歌声が流れる中、それぞれ見どりさんとのご関係や思い出話をしめやかにされていました。

また、スクリーンには「泉湧く家」に入所されてからの見どりさんの生活ぶりが紹介され、そこには他のお年寄りにキーボードの指導をしている姿や、歓談している姿など、ずいぶん穏やかな表情になったなぁと思われる姿が映し出されていました。

それから「偲ぶ会」で頂いた見どりさんへの「全国から寄せられたお言葉」集の中には、本会声楽部会会員の芝田貞子さんや本誌編集長の中島洋一さんのお名前があり、お心を寄せられていました。

皆さんのお話を伺っているうちに、いつしか私は池袋に住んでいた時のことが頭に浮かんできました。私の家と矢澤さん宅とは５００メートルくらいしか離れていませんでした。見どりさんの手料理を頂いた事。見どりさんの依頼で私が作曲したシャンソン組曲「あふれる愛に」を歌ってもらった日々。銭湯で毎日のようにお会いしたこと等が走馬灯のように思い出されました。

ミードン（見どりさんの愛称）のご冥福をお祈り申し上げます。

（たかはし・まさみつ　本会出版局長）

歌ってみたい！弾いてみたい！心に残る日本の作品

日本音楽舞踊会議の出版楽譜のご案内

「日本音楽舞踊会議の出版楽譜のご案内」は、本誌裏表紙に掲載されていました、本会から出版された楽譜を隔月で紹介するコーナーです。

前回は異色の作曲家金籐豊氏の「ピアノのためのトッカータ」をご紹介しました。洋楽的形式感や造形性にとらわれることなく、自己の世界観に忠実に、心の奥底で鳴り響く音を聴くという姿勢を貫いてきた作曲家です。それだけに個性的な作品を書き続けて来ています。

本会の大御所である助川敏弥氏を始め、コンテンポラリージャズの第一人者である北條直彦氏、日本的な風土を基調に個性的な作品を書いている金籐氏等、本会から楽譜を出版された作曲家を改めて眺めてみますと、それぞれに個性の豊かさがあり、本会の音楽的・文化的風土の豊かさを再認識させられます。

これからも続々と個性的な作曲家が登場いたしますので、演奏家・読者の皆様には首を長くしてお待ち頂き、このコーナーをお読みいただくことによって、
日本の作曲家は、現在の日本の中にあって音楽やその現代性をどのように捉え、
創造しているか、その模索の過程が改めて発見され、演奏家本来の本能が騒ぎ、興味の湧くところではないかと思いますがいかがでしょうか。

話は長くなりましたが、今回は中島克磨氏のピアノ作品をご案内いたします。

中島克磨作品

ピアノのための詩曲「モスクワ」Poema　“Moskva”　for piano　(1990 年)

１９８４年５月。春のモスクワは、日々気温が上昇していく。
暗く凍りつく毎日から、明るく暖かい日差しが戻り、
日を追う如く昼の時間が長くなり、人々の心を開放する。
モスクワからアルメニアへ、およそ一カ月に亘る旅の印象や、
モスクワへの思いを独自な語法と自由な筆勢で描いた作品。（手書き譜＝中級）

Ａ４版８頁　　１，５１５円

＜ちょっと一息出版楽譜コーナー＞

このコーナーは、演奏される方が本作品を手にしたときに「この作品を作曲した人はどのような人なのかしら」とか「この作品が生まれる背景は何かしら」という興味津々な疑問にお答えしたり、ピューリタン（筆者）以外誰も知らないエピソード等を簡単に白状して、作曲者や作品をより身近に感じてもらおうとするコーナーです。作曲者にとってはまことに“まな板のタコ”のような心境だとは思いますが、お白州に出されたと思い、粛々としていてください。

中島克磨氏と、師匠の故寺原伸夫氏との結びつきは因縁めいたものを感じます。それは、寺原氏はモスクワ音楽院（チャイコフスキー音楽院）で作曲を学び、本会事務局長を勤められた方ですが、克磨氏も「作曲の道に進む決心をしたのは、中学生の時にロシア音楽に出会ったからです。」と話していますし、克磨氏も寺原氏の後を継いで本会事務局長を勤められた方で、現在日ロ音楽家協会の事務局長も勤めています。どちらもロシアを原点にしているところが共通していますが、両者とも似たもの師弟で“まじめに不真面目をしていた”所もよく似ています。

それから、克磨氏の取って置きのエピソードを一つ上げるとするならば“書いた譜面が汚くて読めない”と言う事です。故寺原氏の師匠であるカレン・ハチャトリアン氏（モスクワ音楽院管弦楽法主任教授）が来日した時に、克磨氏とピューリタン（筆者）は管弦楽法を習いましたが、カレン氏は彼の楽譜を逆さにしたり、裏から見たり、透かしてみたりしていましたが判読できず、しばらくは考え込んでいましたが、克磨氏に「ちょっとここへきて弾いてみてくれ」と言われ、これにはピューリタンもケロケロと笑っちゃいました。

しかし、今回ご紹介している譜面を見たとき、思わず東京都出身のピューリタンが「誰が書いたんやこの譜面」と関西弁になるほど、きれいに浄書されているではありませんか。ピューリタンは、その匂うようなきれいな手書き譜面に、さわやかな感動を覚えてしまいました。

ピアノのための詩曲「モスクワ」

この作品は、１９９０年「ロシアへの思いを曲にしてください」とピアニストの佐々木弥栄子氏から委嘱を受けて作曲され、同年彼女のリサイタルで初演された作品です。

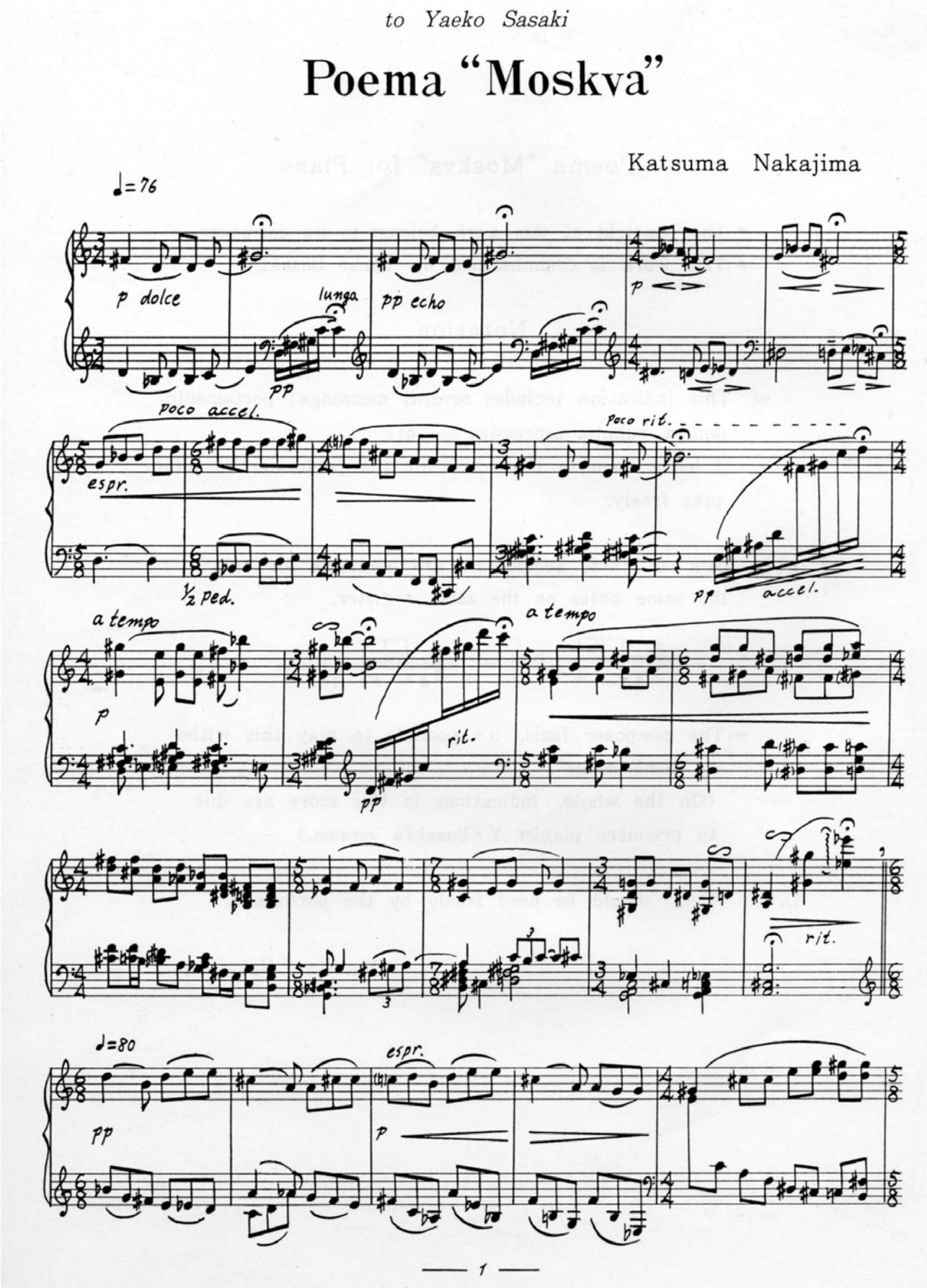
克磨氏は作曲していた当時を振り返って、「寺原氏に連れられて度々モスクワを訪れては、カレン氏やＡ・エシュパイ氏のレッスンを受けていた時で、晦渋な和音があちこちに遣われていて、当時の自分がいかに自らの音を探し求め苦しんでいたかを思い出します。」と語っています。

この作品の良いところは、主題を的確に掴み造形的にというよりも、丁寧に扱っているところ。しっかりした作品を書こうとする姿勢が見える事です。

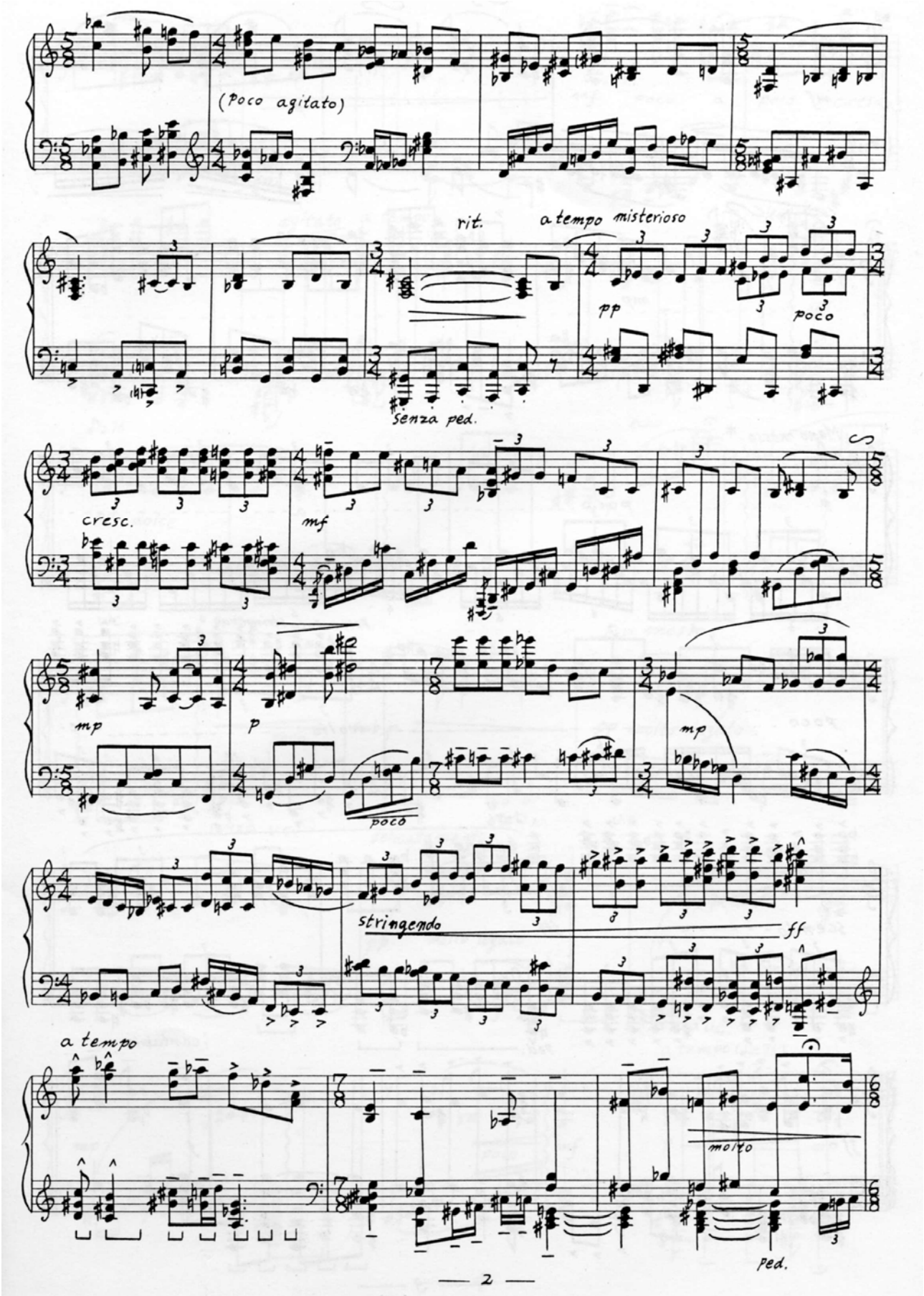
克磨氏の、若き日の意欲が窺（うかが）えて嬉しい限りです。楽譜が希少になってきているので、重版を検討したいところです。

本年７月から新しい楽譜制作がスタートします。もう既に５名の方のご応募を頂いておりますが、楽譜制作をご希望される方は、本会事務所宛お申し込みください。連絡先は本誌奥付けに記してあります。

本会出版局楽譜出版部　ピューリタン高橋



中島克磨作曲：ピアノのための詩曲「モスクワ」　第１ページ



中島克磨作曲：ピアノのための詩曲「モスクワ」　第２ページ

ロシア国立カザン音楽院より留学生募集のお知らせ

作曲　浅香 満

去る３月１１日に発生した東北関東大震災は、被災地はもとより我々日本人全ての心に深い傷跡を残しました。更にこの出来事は世界各国の人々にも大きな衝撃を与え、心ある人々から多くの援助の手が差し伸べられています。音楽の世界でも様々な復興支援のための企画が設けられ、支援の輪も世界中に広がっています。

モスクワから７００キロ東に位置するカザン市でも、震災からちょうど１ヶ月後の４月１１日に義援コンサートが開催されました。比較的腰の重いロシアにあって１ヶ月で大規模なコンサートの準備をして実現させたことは、異例の早さであったと言えるでしょう。（写真①、②がその時の義援コンサーの様子です）

写真②でスピーチを行っているのは、 私が以前指導しておりました高山恵理菜さんで、現在、カザン市にあるロシア国立音楽学院ピアノ科の大学院に相当するクラスに留学しています。留学生活９年目を迎える彼女は、当事国代表としてスピーチと演奏を行い、現地の人々からのあたたかい拍手に大いに励まされたと語っています。

ロシア国立カザン音楽院では、自分たちのできる限りの方法で日本を支援したという立場から、連日様々な提案がなされ長時間の議論をしてくださったようです。先の義援コンサートも同音楽院の主催のもと開催されたのですが、音楽院では更に音楽教育の分野で何か支援できないかと考えた結果、積極的に日本からの留学生を受け入れるという結論に達したそうです。

「支援」としての最大の特典は、通常の最難関といわれる入学試験を行わず、希望者を「原則無試験で受け入れる」ということです。更に、留学生にとって大きな障壁となるのが言葉の問題ですが、入学時にロシア語を全く話すことができなくても構わないそうです。ただし、規定により初年度は全ての外国籍の留学生は「予科」課程での勉強が義務付けられており、そこでロシア語の学習と、高度な音楽院のレッスンに対応できる基礎力の強化を図ることになります。

音楽院の新学期は９月にスタートしますが、できればその前にカザン市を訪れ、現地の様子の視察、担当教授と面談、体験レッスンを受けてみてはどうかという提案をいただいております。

カザン音楽院は、 ペテルブルク、モスクワに次ぐルービンシュタインによって設立された３番目のロシ ア国立音楽院を前身に１９４５年に現在の体制が確立されました。ピアニスト、指揮者として知られている プレトニョフがここの付属音楽学校、作曲家グバイドゥーリナが卒業生として名を連ねています。また様々な形で提携しているロシアで２番目に古い歴史を誇るカザン大学は革命家 レーニン、文豪トルストイ、ロシア５人組の指導者バラキレフの母校としても知られています。更に５人組の一人、ボロディン（本業は化学専攻の大学教授）の化学、医学上の師匠であるジーニンもこの大学の出身です。

カザン市は日本文化に強い関心と敬意を示してくださる土地柄で、先の義援コンサート以前にもこれまで何度か日本との友好親善コンサートも開催され、日本文化を紹介する施設や、博物館にも広くスペースをとった日本の展示品のコーナーが設けられたりしているロシアの中でも極めて親日的な雰囲気に包まれた環境にあるといえます。

日本音楽舞踊会議の会員の皆様には優秀な生徒さんを数多くお持ちの先生もいらっ しゃる事と存じますし、青年会員には留学に興味をお持ちの方も多いのではないかと推察しております。現在留学している高山恵理菜さんの協力のもと、日本語による募集要項を作成していただきましたので、ご一読いただければ幸いです。何かご質問がございましたら、ロシア国立カザン音楽院国際課 e-mail:vitec111@yahoo.com まで直接お問い合わせ（ロシア語または英語、英語の場合は内容によっては回答に時間がかかる可能性があるそうです）いただいても結構ですし、もしよろしければ私、浅香の方に日本語でご質問いただければ、こちらから現地の高山恵理菜さんに連絡を取って、日本語で回答できるように致します。

なお、高山恵理菜さんが指導を受けているエリフィア・ブルナシェヴァ、ピアノ科主任教授はラ フマニノフの師匠であり、フランツ・リストの弟子であったアレクサンドル・ジロティの流派の延長線上に位置する名教師で、その門下からはラフマニノフ国際コンクール、及びスクリャービン国際コンクールの優勝者を始め様々な国際コンクールの上位入賞者が多数排出されており、高山恵理菜さん自身もフィンランドで開催された国際コンクールで１位なしの２位という実質最高位の入賞を果たしています。

上記、特に留学をお考えの方には是非検討項目に加えていただきたく、ご案内申しあげました。

浅香満　連絡先 waseda-ongaku@waseda.jp

写真　①

写真②スピーチする高山恵理菜さん

ロシア国立カザン音楽院の留学生募集要項は　次ページに掲載されています。

ロシア国立カザン音楽院

2011年度入学募集要項

募集専攻

器楽専攻

-ピアノ

-オルガン

-弦楽器

-管楽器

-打楽器

-ロシア民族楽器

声楽専攻

指揮専攻

-オペラ・オーケストラ指揮

-合唱指揮

作曲専攻

応募資格

高等学校卒業以上

試験科目

-専攻別実技

-ソルフェージュ

日程

5月15日　応募締切（申込終了後、ロシアビザ取得の手続きを開始します）

6月29日　入学相談会

7月6日～　入学試験

留学生はロシア語取得の為、本科入学前に一年間の準備科在籍を義務付けます。

希望者は入試期間中、音楽院寮への入居可能です。

試験申込、詳細については音楽院国際課e-mail:vitec111@yahoo.comまで

お問い合わせください。

ロシア国立カザン音楽院　420015 g.Kazan ul.B.Krasnaya d.38 RUSSIA

Tel. +7-927-444-64-31

+7-(843)236-59-62, +7-(843)-238-35-77,

オフィシャルサイト

www.kazanconservatoire.ru

《募集要項中の入学試験が今年度に限り免除となります。》

時評　壊れたパンドラの箱　～原発事故に思う～

福島の原発事故は収束どころが、第１号機のみならず、第2,3号機もメルトダウン（炉心溶融）している可能性が高いらしい。こういう状況のもと、国会では原発事故への政府の対応の悪さを野党が批判し、内閣不信任案提出をもくろむなど、政局がらみの話しになって来ている。確かに、「もう少しテキパキと事に当たれないものか」と思わぬではないが、他の政権だったら、水素爆発や、メルトダウンを防げたとは全く思わない。起こしてはいけない事故を起してしまったことが、今回の問題の全てである。今回の事故は、原発を推進して来た旧政権にも責任があることは明らかであり、時間を事故の起こる前に逆戻りさせることは不可能なのだから、被災者のためにも、国民のためにも、出来るだけ早い収束をめざして与野党で協力して事に当たって欲しいと願う。

チェルノブイリの事故があってからしばらくは、ヨーロッパの国々は原発に対して消極的だった。しかし、地球温暖化、石油価格の高騰などの状況を踏まえ、大事故さえ起こさなければ、地球温暖化や自然破壊を伴わない原発を容認するようになった。そして、我が国では、人々の不安を拭い去るために、「安全神話」というパンドラの箱で覆ってしまった。

チェルノブイリの事故では、稼働中に原子炉が爆発し、しかも政府が機密漏洩を恐れ、事故を公表しなかったため、付近住民も避難せず、多くの住民が健康被害を受けるに至った。今回の事故では、地震後、原子炉は予定通り停止したが、津波で電源がすべてやられ、冷却出来なくなり、水素爆発を起こした。今回も建屋の中は、部分的に100～1000mSv／時と、間違えば命の危険性さえあるような数値が出ているが、周辺の住居地の放射線量はそれほど高い数値ではない。政府のとった避難措置は必ずしもテキパキとはしていなかったが、原発内で作業する人々の健康は心配なものの、一般住民については、放射線による大きな健康被害は避けられるだろうとみている。しかし、住民の受けた、生活破壊、精神的ストレス、経済的損失などの被害は計り知れないものがある。そして、必ずしも悪意からではない、ときには、科学的知識を踏まえない薄っぺらな正義感から生まれる風評が、被災者に更なるダメージを与える。しかし、放射線の影響については、専門家の判断にもバラツキがあり、しかも、一般の人々は放射線についての医学的知識がある訳ではない。今回の事故で、安全神話というパンドラの箱が壊れ、不安、不信感、疑心暗鬼といった魔物が溢れるように飛び出して来た。風評もそういう魔物達がもたらしたものではなかろうか。

ではパンドラの箱から「希望」は出てきたのであろうか。私は予想以上に沢山の「希望」が出てきたと思っている。あるアメリカ人が、大災害につきものの「略奪」、「便乗値上げ」が今回は全く見られなかったと賞賛していた。私もこのような状況下で、なおかつめげずに前を見て進もうとしている被災者の方々、休日を返上し働いている多くのボランティアの方々、危ない原発の現場で、命がけで作業をしている、作業員、自衛隊、消防士などの方々、それから世界中の人々からの支援、そういうものをみて大いに希望をもった。

今回の不幸な事故のすべてを、世界中の人々に公開し、人類の共通財産にして欲しい。人間は自惚から失敗するが、失敗から学ぶこが出来る動物でもあるのだから。

それから、パンドラの箱から出てきて欲しいものがもう一つある。それは日本人が最も不得意とする「長期展望」である。仮に今度の事故を教訓にしてあらゆる安全対策を施し、今回のような事故が100％避けられたとしても、石油などの化石燃料同様、ウランの資源が無尽蔵にあるわけではない。急にエネルギー政策を大転換するのは難しいだろうが、後の代の人々のことを考え、いまこそ、「長期展望」に立って発想転換する、よい機会ではないかと考える。　（中島洋一）

会と会員の情報

１．ＣＭＤＪ　会と会員のスケジュール

6　月

6 日(月) 深沢亮子“翔の会”公開レッスン
【トモノホール 10 時～13 時】
7 日(火) 定例理事会【事務所 19:00】
11 日(土) 芝田貞子・嶋田美佐子・高橋順子「平和のためのコンサート」
創作講談「ヒロシマ・ナガサキ・アンド・ピース」・一本の鉛筆 ほか【牛込箪笥区民ホール 14:00　2200 円】
18 日(土) (社) 日本歌曲振興会埼玉支部第１２回定期演奏会【曲目：金藤豊／秋のほおずき・高橋通／オペラ「竜宮から来た女房」ほか。プロデュース／高島和義　会場：大宮ソニックシティ小ホール／開演 14:00／入場券 1,998 円】
21 日(火)　**ベートーヴェン　ヴァイオリンソナタレクチャー**
（ピアノ部会）Vn. ソナタ第７番 講師：北川暁子・北川靖子
ピアノ奏者：亀井奈緒美【18:00～ 北川靖子宅 】お問い合わせ・
お申し込みは戸引まで
24 日(金)　恵藤久美子（カンパニュラの会）主催「室内楽の響き」
出演：恵藤久美子・恵藤幸子ほか　曲：プロコフィエフ：ヴァイオリンソナタ第２番ほか　【仙川アヴェニューホール℡03-3305-5269 全自由席２０００円】
（この公演は東日本大震災による延期公演です。）
25・26 日(土・日) 藤村記一郎　ミュージカル「サラサとルルジ」
神奈川公演　作曲：藤村記一郎　原作・脚本：佐々木淑子
【逗子なぎさホール（逗子文化プラザ内）開演（25 日(土) 18：00・26 日(日) 13：00）　大人 2800 円（当日 3000 円）・高校生以下＆高齢者（75 歳以上）1500 円・障がい者 1000 円】
26 日(日) ピアノ部会試演会【10：00～12：00 新井宅 】

7　月

3 日(日) ピアノ部会試演会【11：00～14：00 戸引宅 】
5 日(火) **声楽部会コンサート「歌い継ぐ童謡・愛唱歌コンサート」**
【すみだトリフォニー小ホール　18：30】
7 日(木) **定例理事会【事務所 19:00】**
9 日(土) 原宿・午後のひととき～運命は扉をたたく～並木桂子、
田中俊子（pf.）　共演　富永佐恵子（Vc）曲目：運命（4 手連弾）、リストバラード 2 番ほか【原宿アコスタジオ　14：45　2500 円】

13 日(水) 深沢亮子　N響、読響の首席奏者との室内楽の夕べ
曲目:シューベルト/ます　ほか　共演：中村静香(Vn)、店村眞積(Va)、毛利伯郎(Vc) ほか 【目黒久米美術館　18:00】
(3 月 29 日開催予定でしたが、東日本大震災の為延期になりました)

15 日(金)**ピアノ部会主催コンサート「きらめきの夏に」**
ソロ・連弾ピアノ、室内楽【杉並公会堂小ホール　19.00 開演】

16 日土)笠原たかソプラノリサイタル　曲：ブラームス「永遠の愛」、シューマン「女の愛と生涯」ほか(イエルク デムス氏が病気療養のため来日不可となり、急遽、大井美佳ピアノでの公演と変更に致します。)【サントリーホール　ブルーローズ　14:30 開演　4,000 円】

23 日(土) 高橋通－ 琴サマーコンサート　【小田原市生涯学習センターけやきホール（旧中央公館）14:00 開演 1,500 円 】

30 日(土) 高橋通－ ことサマーコンサート　【飯能市民会館小ホール 14:00 開演【1,500 円】

31 日(日) 戸引小夜子「ソロと２台ピアノの夕べ」　共演・安達朋博
曲目：リスト・ドビュッシー・ミヨー ほか
【大成コンサート・スタジオ 17:00　軽食つき 5000 円】

８　月

8 日(月) **定例理事会【事務所 19:00】**

23 日(火) 深沢亮子　朝日カルチャーセンター　共演：上村文乃（Vc）
【新宿住友ビル 7F　13：30～15：00】

９　月

7 日(水) **定例理事会【事務所 19:00】**

15 日(木) **オペラコンサート 2011【すみだトリフォニー小ホール 18:30】(詳細未定)**

25 日(日) 深沢亮子　千葉音楽コンクール本選審査

１０月

4 日(火) **20 世紀以降の音楽とその潮流～様々な音の風景Ⅷ～**
(詳細未定)
【すみだトリフォニー 小ホール 】

7 日(月) **定例理事会【事務所 19:00】**

１１月

7 日(月) **定例理事会【事務所 19:00】**

10 日(木) 深沢亮子 Duo リサイタル　中村静香さんと(Vn)【東京文化会館 19:00】

11 日(金) 並木桂子作曲家シリーズⅤ　ドヴォルジャーク 曲：ピアノトリオ「ド

ゥムキー」ほか【ティアラこうとう小ホール 19:00】
12 日(土) CMDJ 若い翼によるコンサート４【すみだトリフォニー小ホル】
出演者募集中（戸引担当）

12 月

6 日(火) ピアノと室内楽の夕べ　日本音楽舞踊会議主催
【音楽の友ホール 19:00】　深沢亮子(Pf.)、恵藤久美子(Vn.)、安田謙一郎(Vc.)、藤井洋子(Cl.)
7 日(水)　定例理事会【事務所 19:00】
10 日(土) 深沢亮子　麦の会チャリティーコンサート共演：岡山潔（Vn）他
【津田ホール 14：30】

２０１２年

1　月

22 日(日)「2012 年新春に歌う」（仮称）【すみだトリフォニー小ホール】
（詳細未定・昼間公演）

2　月

11 日（土・祭）日本音楽舞踊会議 第５０期定期総会
23 日(土) 深沢亮子ピアノリサイタル
共演：ブリュッセル弦楽四重奏団【浜離宮朝日ホール 19：00】

3　月

12 日(月) 日本音楽舞踊会議主催「出版コンサート（仮称）　詳細未定
【すみだトリフォニー小ホール】
24 日(土) 日本音楽舞踊会議主催「コンチェルトの夕べ」（仮称）
【ヤマハ・エレクトーンシティ渋谷　16:00 開演】出演者募集中
（戸引）

4　月

13 日(金)日本音楽舞踊会議主催　「フレッシュ・コンサート」
【すみだトリフォニー小ホール】

5　月

10 日(木)作曲部会コンサート
【すみだトリフォニー小ホール　詳細未定】

9　月

8 日(土) 深沢亮子ピアノリサイタル　共演：ウィーン弦楽トリオ
【浜離宮朝日ホール 14：00】

会員・賛助会員の皆様へお知らせとお願い

○上記スケジュール記載の本会主催事業（ゴシック文字）には、会員・賛助会員・CMDJ 友の会の方は会員証呈示で無料、または会員割引料金でご入場頂けます。

○毎号掲載されるこの欄に皆様の活動予定を無料掲載させて頂きます。演奏会に限らず、出版、講演等も「音楽の世界・会と会員のスケジュール欄掲載希望」として日本音楽舞踊会議事務所までメールまたは Fax でお知らせ下さい。

○お知らせの際は、①○月○日（曜日）②会員名　③催し物（出版物名）④メインプログラム一曲、もしくはメイン公演・講演内容を一つ　⑤【開催場所、開演時間、チケット価格、等】の順番でお書きください。

○このスケジュール欄は、エコーと月刊「音楽の世界」に毎号掲載されます。

２．新入会員紹介

秋山 来実（あきやま　くるみ　声楽：青年会員）

この度、日本音楽舞踏会議の新入会員となりました、秋山来実と申します。
師匠である秋山理恵先生がアドバイザーとして、また先輩方も多くの方がこの会に所属しておりましたので、学生時代からよく、会主催の演奏会に足を運んでおりました。若い力を発揮出来る場を、数多く提供している印象があり、このご時世で、このような恵まれた環境に身を置くことができ、大変うれしく思っております。

入会を快諾してくださった諸先生方にこの場をお借りして御礼申し上げます。
学生時代は、フランス歌曲を中心に勉強してまいりましたが、この入会を機に、ほかの国の歌曲や、オペラなどにも視野を広げ、挑戦してみたいと考えております。
至らぬ点、多々あるかと思いますが、日本音楽舞踏会議のますますのご発展に微力ながらお力添えできたら幸いです。どうぞ、よろしくお願いいたします。

岡田 真実（おかだ　まみ　声楽：青年会員）

東日本大震災で被災された方々に心からお見舞い申し上げます。
この度は日本音楽舞踊会の青年会員に承認いただき、誠にありがとうございます。今までにこの会を通して様々な活躍をされている方々をみて参りました。これから同じ舞台で学べる機会をいただけることを、とてもありがたく、嬉しく思います。今回の大震災で音楽の持つ力を改めて感じ、考えさせられました。
このようなご時世に音楽を学べる機会をいただけることに感謝をし、精進して参ります。これからますますのご指導、ご鞭撻のほどをよろしくお願いいたします。

編集後記

東日本大震災からあと一週間ほどで３ヶ月経ちましたが、まだ避難所で不自由な暮らしをされていらっしゃる方が大勢いらっしゃいます。また原発事故で避難されている方々は本当に大変だと思いますが、必ず帰れる日が来ると信じて頑張っていただきたいと思います。４月のフレッシュコンサートでは、大震災の直後ということもあってか、若い出演者の皆さんがとても熱のこもった演奏をしてくれました。そして、ささやかな額ですが義援金を集め、被災者の皆様にお送りしました。

ところで、今月号の特集は『19 世紀の社会と文化～リストが活躍した時代～』というタイトルで、西洋の近代史に触れてみました。この時代になると我が国の歴史が世界史と重なってきます。我々が生きている「いま」は、過去から繋がっています。ベートーヴェン、シューベルト、リストなどがどのような時代に生きていたのか、いまと比べてどうかなどと、考えるきっかけにしていただけたらと思います。

（編集長：中島洋一）

本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福　島	福島大学生協	024-548-0091
千　葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東　京	オリオン書房外商部	042-529-2311
	㈱紀伊國屋書店　和雑誌ｱｸｾｽｾﾝﾀｰ	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック㈱	03-3813-6751
	全国学生生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静　岡	吉見書店	054-252-0157
愛　知	正文館書店外商部	052-931-9321
	マコト書店	052-501-0063
大　阪	㈱ﾔﾏﾊﾐｭｰｼﾞｯｸ大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
兵　庫	㈱ジュンク堂書店　外商部	078-262-7794
京　都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖　縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

編集長　：中島洋一　副編集長 ： 橘川 琢
編集ｽﾀｯﾌ：新井知子　浦 富美　大久保靖子　栗栖麻衣子　高島和義　高橋 通 高橋雅光
戸引小夜子　北條直彦　湯浅玲子

音楽の世界 6 月号(通巻 529 号)

2011 年 6 月 1 日発行　　定価 500 円(本体 476 円)

発行人：芙二　三枝子

編集・発行所　日本音楽舞踊会議　The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒169－0075 東京都新宿区高田馬場４－１－６　寿美ビル 305　Tel/Fax:(03)3369 7496

HP：http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/　E-mail：onbukai@mua.biglobe.ne.jp

A/D：音楽の世界編集部 Tel: (03)3369 7496　印刷：イゲタ印刷㈱ Tel: (04)7185 0471

購読料　年間：5000 円　(6 ヶ月：2500 円)　振替 00110－4－65140（日本音楽舞踊会議）

＊乱丁、落丁がございましたらお取替えします